

特203  
997

旅思ひ出日記  
小宮次郎著



始



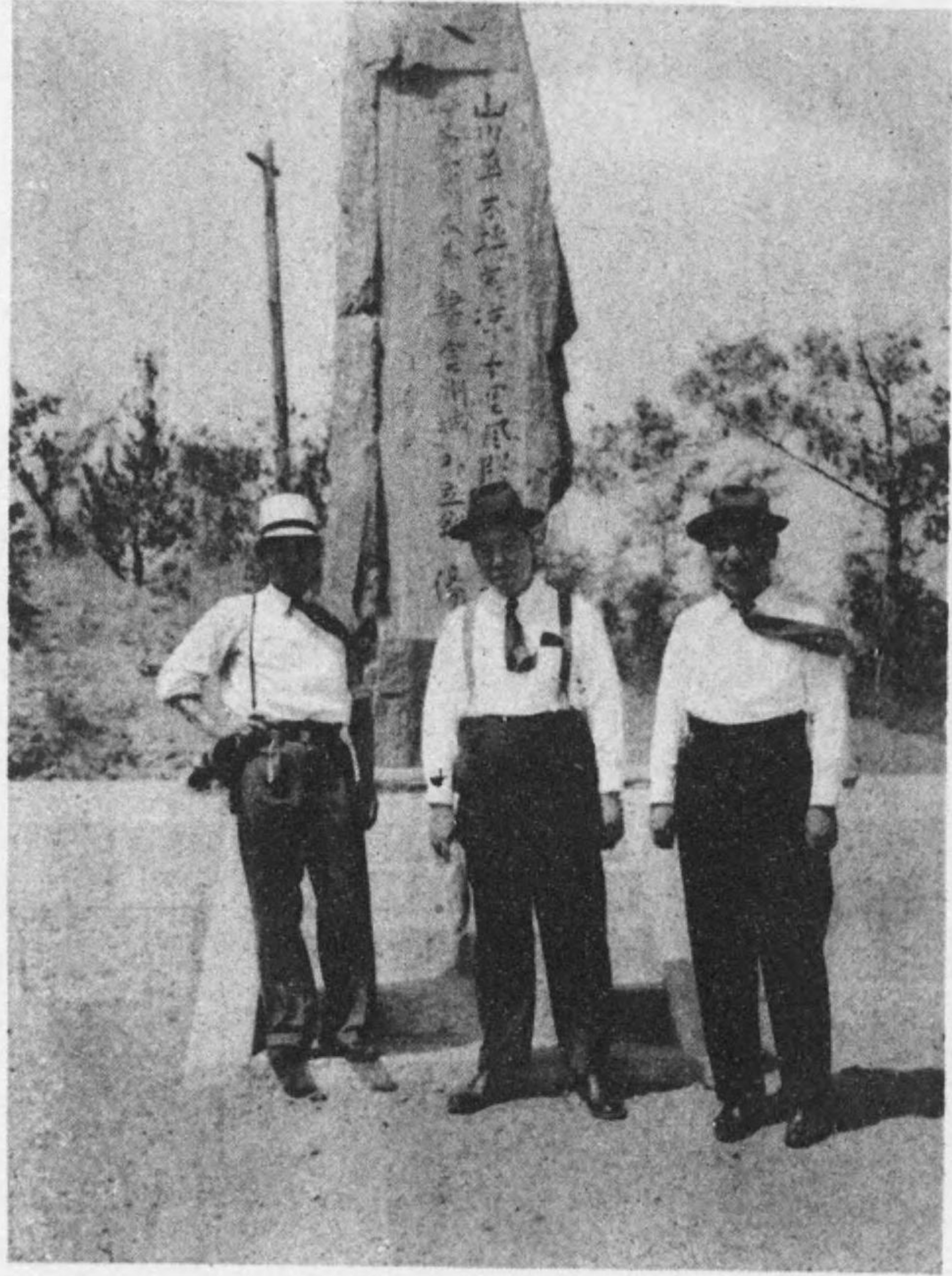
特 203  
997



旅思  
出日記

小宮次郎著





遠山君

著者

木下君





## 例言

一 昨年の秋、日立製作所小平社長及び東横電鐵五島社長の御好意により、初めて満洲、北支、蒙疆、中支の一部を旅行し見學するの機會を得たり。茲に謹んで拜謝す。

この日記はその際手帳に書き留め置きたることどもを基礎として記述し、東横電鐵にて發行する『清和』誌上に昭和十五年九月以降掲載せるものなり。

同じ地方を初めて旅行する社員諸君の參考にもならんかと考へ書き續けたれども、動もすれば脱線し遂に所期の目的に遠ざかること甚しきものとなれり。

和歌は一日一首を試みるやう杉本寛一氏より勧められたれども六十の手習を始めたるばかりの私には不可能事たること明なれば旅行中は作歌せず、歸り來りたる後同氏指導の下に漸く作り上げたり。かくて一旦『清和』に掲げたる後若山喜志子先生の添削を乞ひ取捨して本冊子に載することとせり。

挿畫は松田文雄畫伯の好意ある執筆なり。

旅行中各地に於て御指導御援助を賜はりたる多数の各位に對し茲に謹んで感謝す。

昭和十六年晚秋

小宮次郎

旅思ひ出日記

昭和十四年八月二十二日、夜、木下久雄君と東京をたつ。驛頭に小平、高尾、丹羽、品川の諸氏其他多数の方々の見送りを辱ふしたることを感謝し且つ恐縮す。

ひさびさにあはむ友達しのびつつ木下君とわれは旅立つ  
二人ともに肥えたる男おとこ旅に出づ何れ瘦やせすると人思はむや

\*

八月二十三日、朝神戸につく。下田氏に迎へられ乗船時間まで歡待をりく。  
上田、浅川兩君共に在り。正午鴨綠丸にて大連に向ふ。

飛行機にて五島社長と眺め來し瀬戸内海を船にて行かむ

海上平穩なり。夕暮、北方に當りて電光頻りにきらめく。月おぼろに曇る。  
燈火管制行はれ、吾が乗れる船も行きちがふ船も燈火を消して航行す。

ひた走る船の燈火消えはてて波の音のみただきこえくる  
島やまの近きはくらく遠かるは雨雲きらひいな光りする

八月二十四日、早朝門司に碇泊す。上陸して小倉市開善寺なる祖先の墓に詣つ。

たまさかの旅の序に詣で来る吾が境遇をゆるしたまへや  
在りし日に佩かせましつる國行は國の實と定められにき  
み墓邊は松の雫の繁くして碑にむす苔のいやましにつつ

正午出帆す。天氣晴朗なり。

丈夫のきほひてわたる玄海を吾れも渡らむ六十にして

薄暮、壹岐、對島の間を過ぐ。海は油を流せるが如し。今宵九日の月は晴れ

わたりたる空にかかりて輝く。

神戸、門司、大連とも早魃にて清水の搭載意の如くならず、本船の水は大阪にて供給を受けたりと聞く。その水量にて大連までの往復をなすため、入浴制限せられ、今日は門司より乗船したる者のみ入浴す。吾等資格なし。

八月二十五日 晴、朝起き出づれば船は朝鮮西岸の多島海を航行中なり。多島海を過ぎ大黒山島燈臺あたりより一直線に大連に向ひ黄海に入る。このあたり島は影をひそめたれども行き違ふ船の數多し。終日平穩なる海面を眺め暮らせど倦かず。

日光の反射をさくる眼鏡かけたゆたふ波を見つつ居る吾

今日も入浴せず。夜映畫の催しあり。濱野、河尻兩君より激勵の電報無電にて來れど答ふる氣にもなれず過ごす。



八月二十六日 晴、朝八時大連につく。埠頭に於て竹内君、秋田夫人、遠山君などに迎へられて大和ホテルに入る。

ほの見ゆる山は遼東半島なりその名聞きしは中學生の頃  
その埠頭は東洋一と友のほこる大連港に船ちかづきぬ  
近づきし長き埠頭にあふれたる群集の中に友を見出でつ  
名を知りて行きたき處數多あり四十五年にしてここの地をふむ

九時半に出る遊覽バスにて市内を見物す。山の茶屋、忠靈塔、大連神社、大廣場、滿洲資源館、大連驛、大佛、星ヶ浦遊園、露天市場、油房、碧山莊、埠頭の順序に廻る。

星ヶ浦遊園には後藤新平伯の銅像あり。園内ヤマトホテル廻廊にて海を見晴らしつつ晝食す。親子井の蓋をあくれば蠅群がり來りて氣味悪し。

山の茶屋は山腹綠樹の間に在りて大連市内を俯瞰するところなり。この附近一たいに樹木あり。アカシヤの木多し。

露天市場は一名小盜兒市場と稱へ、滿支人の日常生活必需品の市場にして且つ民衆的娛樂場なり。この市場の中に種々雑多なる古き品を集めて賣るところあり。斯かる品物を廢品として原料に還元することなく、そのあるが儘の形に於て再び利用せんとする仕組なり。恐らく小修繕を加へあるべし。空き瓶や罐や、古き工具や片われの靴などあり、古釘を延ばしその寸法に従ひ整理しあるなど誠に敬服する點なしとせず。我が國にも古物商はあれども、斯の如く集團的に徹底し居るものを知らず。斯く物に對する執著の強きことは或は漢民族の特色の一にあらざるか。支那興亡の跡を回顧し、漢民族が他の強き者の前には一旦は屈服し居るが如きも、機を見て再三擡頭する點に思ひ到れば執著心は物にのみに限らざるが如し。

碧山莊は埠頭の荷役に働く支那人苦力の宿泊所にして、赤煉瓦建物棟數九十を超え收容人員一萬五千人を過ぐと云ふ。この華工收容所開設以來、殺伐なる犯罪頓に減退せりと聞く。本所は相生某の創始するところなり。

千萬の苦力はここに憩らひてその生業をいそしむときく

相生の大人のいさをし反り見て大和男子と吾はたたへむ

夜中當地産のクリスタルグラスを買はんとて探せど思ふものなし。宿に歸れど入浴するに湯なし。風呂の中に水たたへあり、これにて洗ふ。水道涸れ時間給水なりと云ふ。

\*

八月二十七日 晴、午前、大房身に在る關東州鹽業試験所に於ける天日製鹽地を見學す。吾が國の如く曹達灰の大部分を輸入に俟つ國に在りては大に研究するの必要あるべし。内地は降雨量多く、蒸發量少きところなれば人工熱を用ゐて製鹽するの外なし従つて岩鹽、天日製鹽に匹敵すること難しと云ふ。天日製鹽法を見るに、海水を浅き大面積の蒸發池に入れ、これを天日にて蒸發し、濃度の高くなりたるものを、他の浅き稍々小面積の結晶池に導きて更に蒸發し、ここにて結晶鹽を析出せしめ、その結晶の厚さが五乃至十耗となりたるものを掻き集めて取り出し、堆積して脫水せしむる仕組なり。鹽の結晶は正六面體にて賽の如き形をなせり。幾多の變形はあれど、悉くこの正六面體を基礎とせる

ものなり。幾萬幾億となく鹹水中にころがり居れども出鱈目の形をなせるものなきは何人も當然と考ふるも、自然の妙、味ふに足るべし。飽和點に達せる鹹水中に長さ一厘にも達せざる海老の如き小さき蟲の生息せるは異様に感ず。

ことわりはつゆたがはざり幾億の鹽の結晶の同じ型せる  
現なく鹽の結晶を覗きをれば小さき赤むしさわに群れるつ

正午、南山に至る。日露戰役中第二軍激戰の地なり。山腹に乃木將軍の詩「山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。征馬不前人不語。金州城外立斜陽」を刻める碑あり。碑前に立ち遙に海の方面を眺めて説明を聞く。説明をするときの遠山君は豫備騎兵將校の資格になりきつて居るものの如し。この南山は險峻な山とは云ひ難きも、眺望展開せる爲め近寄り難かりしならんなど素人判斷をなす。

半歳と敵がたのみしこの山を一日にして落しいれしとふ

詩碑より一段下りたる廣場に設けある無料休憩所にて晝食をなす、忽ちにして蠅群來り惱ます。傍に滿人兒童あり、辨當の残り、空壇など持ち去る。誠に仕末よきものかな。

午後、三十里堡附近の大日本鹽業株式會社の鹽田を見學す。期せずして日立電動鹹水ポンプの運轉せるを見る。歸路林檎畑に寄る、附近に鐵道線路の橋梁あり。舊露國時代建設せるものは單線石橋なり、吾が有に歸して後増設せるものは鐵橋にして相隣せり。

夜、秋田君の宅に入浴の招待に應じて赴く。遅く行きたる爲め湯あつきに過ぎて入ること能はず。汲み出し自然に冷やして使ふ。適當な溫度までうめるときは明朝の炊事に差支ありと云ふ。不便思ふべし。有るときは所謂湯水のやうに使ふ水なれど、無いとなると生命にもかかはる貴重品となる。夜半まで閑談して宿に歸る。

\*

八月二十八日 午前十時々小雨あり。然し水道に影響するまでに至らず。自動車にて旅順に赴き見學す。往路は黃海に近き道を通り歸路は渤海側の道を通る。

往路左手に低く廣き草原あり、大連の水源地なりと云ふ。水らしきもの少しも見えず。斯くては大連の時間給水も他の所より補給するなるべし。

水涸れし貯水池の底は青々と草生ひしげり牛のあそべる

時々雨降れば戰蹟廻りも自動車の便なるところのみにとどむ。

記念館、二〇三高地、水師營、博物館、白玉山などの順にて沿道の各所を見學す。軍事に疎き吾等には何等云ふべき資格なれどかほどの要塞を攻略したる皇軍の威武には感歎せざるを得ず。

爾靈山の碑の前に立ち丈夫の貫ぎ遂げし意氣をしたたふ  
港口はせまく見ゆれどその夜の閉塞隊には廣かりにけむ

博物館は數日を費して鑑賞するの價值あらむ。吾等は急ぎて鑑賞す。思ふところありて陶磁器の前に足をとどむれども鑑賞するの素養なきを悲しむ。百戸

張成と云ふものの墓碑あり。彼は弘安四年元寇の役に従軍、我が國に來襲し神風に遭ひ漸く逃げ歸りたる一人なるが如く誌せり。元寇役に關する唯一の金石資料なりと云ふ。

元寇のとき生還したる張の墓碑に『八月朔海風作、船壞軍還』

今日通過せしところには樹木多し。關東州は吾が國の手に歸してより年經たる爲めなるべし。

\*

八月二十九日 晴、朝九時特急アジャ號にて大連をたつ。流線型機關車は約八十五軒の平均時速を以て大石橋まで颯爽と無停車にて走る。車室には空氣調整装置あるものの如し。

途中驛に金州、得利寺、熊岳城、蓋平などの名あり。何れも日清、日露の兩役中に覺えたるところなれば當時の少青年時代を追憶す。大石橋までの間は大概山近くにあり。大連を遠ざかるに従ひ樹木少くなり、特に松樹は殆んどその

影を没するに至る。金州を過ぎたる頃、車窓左に日清役に於ける志士の記念碑三崎山上に見ゆ。また渤海灣に臨む海岸に鹽田の見ゆるところあり。或はまた茶褐色を呈せる廣大なる荒地にして草木一本も見えず燒野原の如きところあり。かかるところがアルカリ土壤と稱するものならんかなど思ひつつ過ぐ。

一旦、大石橋に下車し、次の區間列車を待つ。その間に附近のマグネサイト焙燒工場を見學す。工場よりほど遠からぬ奥地にマグネサイトの世界的大鑛區ありと云ふ。この鑛石はマグネサイトとしても、又輕金屬マグネシウムの原料としても重要なものなり。

この大石橋驛にて東横百貨店の包装荷物を所持せる一旅客下車し去る。偶然と云ふべし。

東横の包紙見したまゆらに白きデパートある澁谷想ひつ

十四時半、湯崗子につき對翠閣に入る。驛より遠からざれば徒歩にて行く。廣き道路に丈高き楊柳の並木ありて兩側より枝葉相接するまでに繁茂す。

吾が歩むみぎりひだりの楊柳なみ木秋近かるに緑清けし  
大連のアカシヤよりもこの里の柳をめぐと吾は云はまし

先日より痔少しづゝ悪化しゐたれば獨り旅館に残りて静養す。木下、秋田の  
兩君は附近見物に行く。鞍山近ければ鐵鑛石を爆破する音遙かに轟く。窓より  
眺むれば前面の遊園地風に作れる池の彼方に白衣の勇士の姿見ゆ。ここに療養  
所設けあるものの如し。温泉は無色透明のアルカリ性にして攝氏七十五度なり  
と云ふ。

大君の御桶となりて傷つきし益荒雄男はゆあみすらしも  
丈夫は傷いやさむとこの里にゆあみしつつも力し貯はふ  
温泉のふねに獨り寛ぎ家しのぶをりから轟く鑛を破る音  
ゆにひたり疊に寝てまどかなる夢見給へと秋田君云ふも

因みに、第四紀洪積層の時代に起れるアジヤ東邊の地殻大變動に依り日本海、

渤海、黄海等陥没し、またこの湯崗子温泉、熊岳城温泉等を生じたりと云ふ。

八月三十日 今日には昭和製鋼所を見學する豫定なれども、痔なほ悪しく歩行  
稍困難なればこれを中止し、朝遅れて湯崗子をたつ。この日静養して翌日見學  
すれば可ならむなど思ふは内地にてのことなり。こちらは旅館にとめて貰ふこ  
とが一苦勞なれば、出來得る限り宿泊豫定地を變更せざるが吾等の如き案内さ  
れる者の道德の一なりと信ず。見方によれば、豫定の箇所箇所に宿泊すべく旅  
行し居るが如き感あれども、實情は既にかくの如し。但し樹下石上をも厭はず  
行き當りバツタリにドンナところにも構はず寝て行く覺悟さへあれば、斯か  
る窮屈は大に滅殺せらるべし。今回案内に當れる諸君が吾等に南京虫の憂ひな  
きよき室を準備せんと苦心せられ居るを蔭ながら知りては夢にも勝手氣儘はす  
まじきものと覺悟せるなり。

ここに來て屢々聞ける言葉なれば吾もいつしか没法子と云ふ

車窓の右側に鞍山の鐵鑛山を見、左側に昭和製鋼所を見る。遼陽、沙河など大會戦の行はれたる地を過ぎて十三時奉天につく。

驛頭に新聞記者あり刺を通じて曰く「昨日大連よりアジャに乗り大石橋驛にて下車したまでは判然せるも、その後行衛不明になつたから捜してゐた」と。ただ、挨拶だけにてすむ。『云はざる』『聞かざる』の暗示なりと思ひつつ大和ホテルに入る。

ハイヤ非常に少く、乗り物の不便なるに閉口す。幸ひ竹原君（同和自動車會社理事長）の好意によりパツカードを借りて東陵、北陵、北大營、同善堂、舊張學良洋風公館など見學す。尙、竹原君の秘書同乗し呉れたれば言葉に不便なし。先日來雨降りたりと見え、道路とどこころに水溜りあり。この水溜りに家鴨喜び泳ぎ居るさまなど一の風景と云ふべし。今日も時々雨降る。

この奉天は清の第一代及第二代たる太祖及太宗の都したるところなり。今城内に存する故宮はその宮居にして太宗の時代に完成し乾隆帝の時代に大増築を施したるものなりと云ふ。太祖が後金と稱して自ら王位に即き、明朝に對し獨立を宣言したるは我 後水尾天皇の元和二年（皇紀二二七六年）にして大阪夏

の陣の翌年、家康の歿したると同年なり（太宗のとき大清と改む）。その後二十八ヶ年を経て第三代世祖の代に初めて山海關を越え北京紫禁城の王座を占むるに至れり。斯く云ふばかりにては吾等に何のかかはりも無き様なれど、實は然らず。徐に明朝興亡の跡を顧みるとき吾等は豊太閤の朝鮮征伐を追憶せざるを得ず。さなきだに爛熟腐敗の結果、衰亡への一途をたどりつつありし明朝は外藩朝鮮の救援として國帑約八百萬兩を支出したる爲め紊亂せる財政は彌々その極に達し、勢ひ、邊境の防備を缺如するに至れるなり。この機會を逸せず蹶起し獨立を宣言せるものは實に滿洲の統率者努兒哈赤にしてこれ即ち後の清の太祖なり。斯の如く、よしそれが意識的にあらずとするも、我が對明政策が清朝の興隆に少からず拍車をかけたるは事實にして、吾等の特に興味を覺ゆる點なりとす。

東陵は太祖を葬るところにして天柱山に在り。陵の周圍十六軒を越え、全山老松を以て蔽はれ、翠巒の裡に極彩色の樓閣聳え立つ。

丹のはしら瑠璃のいらかを仰ぎつつ隆恩門の前に汗ふく

北陵は太宗を葬るところにして山地にあらず、その周圍約八軒なりと云ふ。東陵と云ひ、北陵と云ふは奉天城内よりの方角を示せるものなり。何れの陵も正門より進めば磚道の兩側に各種の石獸あり、更に牌樓、華表などを経て隆恩門に至る。隆恩門は高き周壁の一部に設けられたる五彩麗しき三層樓にして、これを入れれば靈柩を葬れる寢陵あれども門内に入るを禁ず。北陵の石馬は太宗の愛馬を形どりたりとて有名なりと云ふ。

同善堂は約六十年前に左寶貴將軍の設立せる救濟施設にして、貧民、醫務、孤苦、工藝の四部に分つ。吾等の特に眼をひきたるものは、その捨兒收容所なり。道路に面し窓を設け、窓の上部に救世門と誌し、窓の内に一の臺あり。臺には監視人なし。この臺に何人か捨兒を載せ影を潛むれば、臺の低下によりベル鳴り、兒は收容せらるる仕組なり。吾等が左寶貴の名を知りたるは日清役中にして、彼が馬上太刀を揮つて奮戦せる石版畫によると記憶す。今適々同善堂に來り四十餘年の往時を追懷し、左寶貴が一介の猛將にとどまらざりしことを知る。クリステイの『奉天三十年』中に彼に關する左の記事あり。

彼の軍紀は峻嚴であつて軍律違反者には怖れられたが部下からは慕はれ且つ信頼され又あらゆる階級の尊敬を受けてゐた。彼は捨兒收容所を創立維持し毎冬二箇月間貧民施粥所を開き自ら嚴格なる回教徒たるに拘らず我々（基督教徒）の病院に多額の寄附をした。（岩波新書）

左忠莊公寶貴將軍を想ふ

或る時は太刀を揮ひし腕かむなもて親なき兒等を抱きたりけむ

北大營は滿洲事變の萌芽を作れる柳條湖にほど近き兵營にして我軍寡兵を以て急襲占領したるところなり。今は廣大なる敷地に廢墟の兵舎殘存するのみ。その一部に北大營戰蹟記念碑立つ。

舊張學良洋風公館は外觀莊麗なる三階建にして城内に在り。今は國立圖書館となれり。内部參觀の便なければ庭前より之を眺む。右手廻廊のあたりが揚宇霆の射殺せられしところなど説明を聞く。庭前に南畫に見るが如き形せる丈高き岩幾つかあり。何れも數多の石をセメント(?)にて繼ぎ合せたるものなれ

ば、思ふが儘の形となり居るも、敢て不思議とするに足らず。ただその素石が金の鑛石なりと聞きては呆るるの外なし、中門の石額に張作霖の書ける『慎行』の二字刻みあり。吾等はこれを仰ぎて張家父子の末路を憐れむ。

庭の面に黄金の鑛を積み残し今はいづこになに眺むらむ  
行を慎めと云ふことのはをのこせる親もその子もかなし

夜竹原君と閑談す。

\*

八月三十一日 朝起き出づれば雨降り、終日続く。奉天は近來雨多くて困る由なり。

午前、鐵西地區を見學す。この地區一帶は奉天に於ける工場地帯にして、何れの工場も廣大なる土地を占め、内地の比にあらず。

滿洲日立の工場に至れば、主腦者悉く若くして潑刺の氣漲れり。大に意を強うするに足る。滿人少年工の十五六歳なるが一心不亂に働き居る様など新興國

の面目實に躍如たるものあり。

手ぢからのあらむかぎりに槌ふるひ砂型作る少年工はも  
頸筋のよごれ瘦せたる少年工もその顔見れば滿更でなし

竹内專務其他諸君の辛苦を想ひて

かかる兒らを集め教へて新しく國を興さむ人らたふとし

午後、城内の滿人經營の百貨店吉順絲房に至る。陳列せるもの内地製品多し。店内、照明暗けれども、足をとどめて商品を覗けば、店員スキッチを働かせて必要なる箇所を照す。漢民族の意を用ゆること大概かくの如し。雨中更に法輪寺を見物す。汽車にて撫順に至り炭礦クラブに宿泊す。窓を開けば雨中の市街一望の裡に在り、遙かに渾河を望む。

\*

九月一日 今日も雨。昨日より痔の外に神経痛少しくおこる。午前、奉天に赴き滿洲醫科大學病院長松井博士に相談し、且つ今後旅行先の各病院長への紹



介状を貰ひ、尙旅行中に於ける注意を聞く。尋いで博物館を參觀す。多種多様の陳列品多數あり、恐らく珍寶少からざるべし。ただ一巡するのみにて館を出で、故宮を門外より拜しつゝ停車場に至り、汽車にて撫順に引き返し、自動車にて各所を見學す。吾等の考慮すべき點なしとせず。泥濘、車の進行を妨ぐること甚し。

輕き神経痛おこる、雨のためと思ひければ

雨しげくはたはた膚痛めば旅の宿に雨はれむ日を乞ひか禱みやまず

\*

九月二日 雨、撫順をたち奉天を経て十七時二十分新京に着き船木君に迎へられ大和ホテルに入る。神経痛全く癒えざれば宿に在りて静養す。

遼陽あたりより以北、車窓より見る景色著しき變化なく、野、畑續くのみにて山を見ることなし。畑には高粱、黍、粟、蕎麥、大豆等あり。畑の一區劃は餘り廣く感ぜざれども、内地のそれに較ぶれば遙かに大なるべし。

車中展覧

大よそは高粱にして粟黍のまじり實るを見らく飽かなかく

高粱は眼の見るかぎり果しなし中にま白に蕎麥の花さく

\*

九月三日 曇、朝遊覽バスに乗り新京神社、日本大使館、忠靈塔、寛城子戦蹟記念碑、宮内府、市公署、協和會館、南嶺戦蹟記念碑、建國廟、國務院など市内を見物す。この日、客多く、バスを連ねて廻り、説明は合併して聞く。案内のバスガールは交代して説明をなす。場所により受け持ちを異にし、恰も主役、端役の別あるものの如し。スターらしき一人、少し國訛あれど、雄辯に戦蹟を語り、感極まり聲涙俱に下ると云ふ調子なり。その訓練誠に感歎に値す。乗客の一人密に曰く、この前のときも同じところにて泣きたりと。

新京はもとの長春の地なり。この長春を國都と奠めたる理由を擧ぐれば、一、滿洲の中央なること、二、政治的色彩の稀薄なること、三、交通上の要衝なること、四、飲料水の豊富なること、四、地價の低廉なること等なりと云ふ。

新京の第一次國都建設事業は一昨年を以て竣工したるが、未だ全計劃中の半

にも達せざる由なり。將來——全計劃成るの日に至らば、定めて雄大なる新興國首都の相貌を具現するに至るべし。今日通過せる道路の如きその廣きもの幅六十米に達すと云ふ。新装の諸建物何れも堂堂たるものにして形式一様ならず清新の氣漲れるが如し。

新興滿洲國に來りその發展の

顯著なるに感激して懷を述ぶ

リットンは何と謂とも東亞には王道ありてかくも榮ゆる

瞳碧き醜の奴等こそぞり立ちつぶさむとせしこの國さかゆ

\*

九月四日 晴、朝新京をたつ。車窓の景色は大體、奉天、新京間と大差なく、見渡す限りよく耕作せられ畑に高粱多く大豆少し。世界産額の約六割を占むる滿洲大豆は南滿に於ては遼河及松花江の流域、北滿に於ては齊々哈爾及哈爾濱を中心とする松花江流域地帯が主要産地なりと云へば、吾等の通過せし沿線に多く見えざるは毫も怪しむに足らざるべし。

ときたまに野菜つくれる畑あり人多くすむ街のちかくに

十二時半過ぎ哈爾濱につきホテル・ニューハルビンに入る。十四時、驛前にて遊覽バスに乗る。哈爾濱神社、忠靈塔、志士の碑、二烈士の碑、博物館、孔子廟、ロシア人墓地、傅家甸の支那商店街を経て埠頭に至り、船に乗り換へ濁流の松花江を遡り太陽島を眺めつつ觀光亭に至り、再びバスに乗りキタイスカヤの露人繁華街を過ぎて驛前に戻る。市街の光景、今日まで見學せしところと趣きを異にする點多し。帝政ロシアが永遠の目的を以て東亞に於けるモスコトを現出せんと企圖せしところなれば、規模の露西亞式なるまた已むを得ざることなり。ロシア寺院、ロシア人墓地など特異なるものと云ふべし。昭和七年滿洲國創建せられ同十年東清鐵道の全部が滿洲國に接收せられたる後は當市よりソ聯の勢力一掃せられたる形となれり。露人經營の百貨店内に掲出せる『私等は日本語を話します』と云ふピラの意義明瞭となれり。夜のキタイスカヤの繁華街など時と共に衰退に赴くものなるべし。吾等も晝通り、夜通りたれど、聞きたる程度にあらず。

新市街の南郊外競馬場に近き廣袤たる原の中に忠靈塔、志士の碑、二烈士の碑あり。

忠靈塔は日露戦役、シベリヤ出兵、滿洲事變の犠牲者三千四百六十六柱を合祀せるところなり。

しらま弓哈爾濱の野に夕陽さし忠靈塔はたかくかがよふ

志士の碑は日露戦役中、鐵道爆破の特別任務に服したる横川、沖その他の四志士を記念する爲め、二烈士の碑は同戦役中、變装敵情偵察に従事したる小林大尉、向後伍長を記念する爲め何れも諸士が銃殺せられし場所に建てたるものなり。横川、沖の兩志士、小林大尉、向後伍長の兩烈士とも、その處刑前に露軍にて撮影せし寫眞残りありて碑に近き茶屋にて配布す。これを見るに雄姿勃勃として死の迫るを意に介せざるものの如し。

志士烈士の今はの姿雄々しけれ人のこの世の嚴肅ぞこれ

丈夫の今はのきはの雄々しさに敵たたへけむ吾は泣なむ  
今はとてきみ萬歳の雄たけびはこの國原にとはに響かふ

九月五日 晴、船木君急用起り、朝アジャにて新京に歸る。黒河への旅行は木下君と二人にて行くことに定め、旅館その他一切のことはジャパン・ツーリスト・ビュローに依頼す。ビュロー案内所に白系露西亞婦人（？）あり、日本語をよく了解し、吾等の爲め百方周旋し呉れ些の遺憾なし。職掌柄と云へばそれまでなれど、かかる例少し。茲にビュロー並に同婦人に感謝の意を表す。

船木君を送りて後市内見物に出かく。東京にてイクラはこの地の名産と聞きたるが如く覺えあたるにより試食せるに、左程にも感ぜず、元來好まざるが爲めなるべし。安全ピンを買ふ。尾籠な事ながら禪の紐の下るを防ぐ爲めシャツに點綴するに用ゆ。東京より持ち來りたるものは動もすれば脱出し腹の皮を刺すの虞あり。この地にて買ひたるものは獨逸製らしく、値高からずして優良なり。材質の差違もさることながら『ヤキ』の具合も輕視せられ居るならんかと

思料す。我國に於て識者は知らざるにあらず、製造者無關心なればなり、否、販賣者の罪か、購買者の罪か、大に考ふべき價值あるべし。吾等は相當の豫備品を使ひ果して今購入す。脱出し遺失すること多ければなり。結局材料の濫費となる。些少のことと云ふ勿れ。材料資源は悉く國外より來る。學問の普及實踐化、誠に難いものなり。

博物館を改めて見る。農業經濟部、産業經濟部、土産工業部、大豆製品部、考古部、風土部、動植礦物部などあり、長時間に亘り見學し、得るところ少からず。

夜二十三時哈爾濱をたち、黒河に向ふ。プラットホームに伊藤公遭難記念指標あり。同公が明治四十二年十月二十六日朝六十九歳を一期として安重根の兇弾に殞れたる地點なり。足をとどめて黙禱をささぐ。

かりに今眼開きて見たまはば世界の推移をいかに思さむ

この日、痔、神経痛ともに全く癒え、心神初めて爽快なり。

九月六日 晴、列車は渺茫たる大原野、起伏緩なる小興安嶺などを貫通して走る。

青き木は一本だにも見えぬ野に雲のおとせる黒き影あり  
渡津海のりねりの如き小興安に白樺の森まだらに見ゆる  
落葉せる木原の中を汽車行けば鹿なるらむか二疋つれ立つ

夕刻、黒河省の黒河と云ふところにつく。この町は黒龍江を隔ててソ聯ブラゴエシチエンスク市に對する要衝にして北緯五十度を超ゆと云ふ。驛長土倉氏は好意を以て自ら案内し説明をし呉る。日の暮れぬ内にとて黒龍江畔に急ぐ。河幅五百米に過ぎずと云ふ。對岸手にとる如く見ゆ。

どす黒き水は無言に渦巻きて行手に見ゆるブラゴエの街  
向岸はソ聯の領土青き森の彼方に立てるパラシエート塔

ひそやかにこの河わたる冬の夜の愛しき話想ひいでつも

市内を見物す。電燈少くして暗し。この地、砂金の産地に近ければ相當賑へり。たゞし黒河省全體の人口が〇〇に達せずと云へば萬事想像せらるべし。この日、旅客多く豫定の宿に泊ることを得ず、漸くにしてとある宿屋に入る。壁厚き煉瓦家屋の中に日本座敷をしつらへたる七疊半の室に通る。二階なれども廊下は土足にて歩むゆゑ汚し。廊下より一尺程高きところにある障子を開くれば奥行一間半、間口二間半の座敷なり。然し狭けれども形ばかりの床の間ありて粗末なる刀掛を置く。汚ければ風呂にも入らず、木下君と並んで寝る。夜中寒さを感じず。翌朝車掌に聞けば最低攝氏六度位なりしと云ふ。

\*

九月七日 朝、黒河をたち、同じ線路を哈爾濱に歸る。小興安嶺中にはところどころ清流ありて珍し。終日車中に在り。午後曇。六時頃より小雨降る。

この驛えきに冬來るらし犬の皮着たる苦力クワリのうづくまり居る

見下せばアンペラ葺かきの堅穴屋流れに沿ひてあまた並べる

\*

九月八日 晴、六時過、哈爾濱に到着す。ホテル・ニューハルピンに至り船木君を待つ。十時、北滿江運局の哈爾濱丸に乗り佳木斯チヤムスに向ひ松花江を下る。哈爾濱は北滿に於ける鐵道の中心たると共に、松花江岸に於ける水運の第一要點たり。埠頭は石材を以て護岸を施し、これに近く煉瓦倉庫並び立つ。この附近の河幅は廣きところにて約一千米なりと云ふ。水は黄褐色に濁りて恰も内地に於ける洪水時の如し。傾斜緩なる護岸の一部に大勢の人並びて頻りに洗濯をなす。一見不思議に思はるれど、人に聞けば、黒龍江と云ひ、この松花江と云ひ、その水質が綿布の漂白に適すと云ふ。

爲すすべも處かはればかはるなり濁れる水に衣さへ洗ふ

吾れらの乗れる船は吃水浅き千七百噸の古きものにして、船體中央の兩側に大なる外輪を設け、その廻轉により悠々として下る。哈爾濱より遙か上流まで

航運の便あれども、松花江の利用価値の最も大なる部分は、吾等の今乗り行かんとする區域なりと云ふ。濁濁せる水流は盛に土砂を運び、各所に堆積して淺瀬を作り、甚しきは、水深二尺位のところありと云ふ。航行の支障を避くる爲め、河の兩岸に多數の導標を設け番號を附す。猶左岸に白、右岸に赤の接航標、河中に浮標を置く。下りつつ兩岸を眺むれば、一望千里とも云ふべき大平野の中に、ところどころに畑あるのみ。森や林らしきもの見えず。河岸一帯護岸の施設殆んどなく、水流擅にこれを浸蝕す。

濁りたる流に浮ぶ鳥見えず野に畑ありてたゞひろらなる  
船下る河の行手を見さくるに山一つなくて野の涯知らず

哈爾濱・佳木斯間（四三七軒）の運賃一等十二圓五角にして、船室は一人部屋なり。部屋に入れば掲示あり。（一角は十錢也）

御希望のお方は御用命下さい。

寢具券 一人に付一等二圓五角

浴衣券（枕付）一人に付一等 五角  
御使用區間 哈爾濱、富錦間

事務長

右は汽車の寢臺券に相當す。食堂には定食ありて別に料金を徴收す。十八時三十分頃、始めて木蘭縣に碇泊す。甲板より見れば滿人の下船するものの査證嚴なるが如し。河岸に西瓜を並べ賣る者あり。夜半霧深くして船足遅る。

濁りても狭霧は立つかこの夕みをの標木見えがてにして

\*

九月九日 晴、七時半頃、三姓に碇泊す。ここは哈爾濱の下流三百三十二軒に在り、牡丹江の合流する地點に位し、松花江筋に於ける古き小都會なりと云ふ。船より眺むれば電燈線の架設せるあり。また埠頭には石炭の堆積せるありて、相當繁盛せるところの如し。この地方は小麥、豆類、其他の穀物を産し、また牡丹江上流より來る木材、毛皮等も集散すと云ふ。

約百年前にこの地方を旅行せる佛蘭西カトリック僧の書簡により當時の状態を見れば、

一、三姓の町は北方に於ける官吏駐割の最終地點で法律があらゆる支那人、滿洲人の旅行者に對してその到達することを許す究極の限りである。

一、一望人跡絶えた野原となつた。たゞ一筋の道がそれを横斷して三姓と云ふ松花江の右岸にある小さな村に通じてゐる。樅、榆、松、柏類がどちら向いでも見渡す限り森を成し、背の高い草の繁みがややもすると人丈けを没する。

一、虎は出て來なかつたが他の種類の動物、私に取つては虎にも劣らぬ獐猛兇惡なものが私の行くのを待ち受けて居た。私は一齊に襲撃して來る蚊、斑蚊、地蜂、虻の大軍を何と云つてあなたに説明すればいいかを知らない……私は全然打ち負かされて前に進む力もこれらの昆蟲の刺すのを防ぐ力も無くなつた。荷物を載せ、時には吾等も乗る二頭の瘦馬は草の茂みの眞ん中に倒れて喘ぎつつ食はりとも飲まりともせず……馬は全身血塗れになつて居た……ここで吾等は旅行の方式を變へて夜と晝とを轉倒し夜明け前一時間と云ふに宿に着くことにした。これで二つの恐るべき敵、虻と地蜂は避けることを得た。

一、私は一本の樹の幹で造つた長さ二十五呎幅二呎ばかりの丸木舟を買ひ水先案内として一異教徒の滿洲人を傭ひそれに舵を取らせ私自身は橈を取つて長毛族の國へと出立した。

(以上衛藤利夫著「鞆鞆」参照)

などとあれども、今船より見れば鬱蒼たる森林など少しも見えず、馬を射し殺す毒虫も居らざるもの如し。

三姓を解纜し、また濁流を下れば、遙かに山を望み、所謂下流山岳區に入る。

いかにせばこの河水の澄まむなど夢みる吾を笑はば笑へ  
『百年河清をまつが如し』と云ひきりてよきか吾は疑ふ

正午食堂に入る。昨日より四回目にして、他人の食膳を見るに吾等のものに比し餘分あり。密かにボーイに聞けば、定食をとりて追加すれば一品料理が出來ると云ふ。ピフテキを注文す。贅澤をなさんとするにはあらず、氣味悪ければ直前熱を加へたるものを欲するのみ。

ピフテキの堅き一切れかみ居れば残りの皿に蠅群れ来る

十五時半、佳木斯に上陸、ステーション・ホテルに入る。市内見物をなす。當地は拓務省の第一次移民團が暫く滞留せしことあるを以て普く世に知らる。今は新興都市として諸般の建物を盛に建設中なれば、數年ならずして相當のものとなるべし。店頭の商品は殆んど内地産なるが如し。近き頃まで雨降り居たるらしく、舗装せざる道路甚悪し。

九月十日 曇、朝、驛頭に於て告別式を行ふ。今夏この地方の開拓に従事せる内地學生奉仕隊中の病歿せるものを弔ふ爲めなりと云ふ。この地の人どもも大勢集れるが如し。

停車場に齋場つくりて今ここに男ばかりのとはの告別す  
家さかりここに宿世の縁深く骨に焼かれて歸り行く子や

魂はとはにこの地を護れとぞ遺骨をもちて友ら歸り行く

九時十分、佳木斯驛をたち、十一時九分彌榮驛につく。この距離約五十四料なり。佳木斯を遠ざかるに従ひ山岳地帯に入る。沿線の山高からず、落葉せる灌木多し。小川あり、濁流にあらず。彌榮に近づくに従ひ、畑あり、田あり、農家あり、同胞の働ける様見ゆ。

彌榮村は昭和八年、第一次武裝移民團の入植したる地なり。村公所に至れば、司計加藤四郎男氏ありて村の現況、入植以來匪賊襲來當時の狀況など詳細に説明す。農家一戸の耕地は約十町にして、年收穫高は内地の普通の農家よりも遙に多く、加之、冬期の農閑期となれば、附近の山地森林に入り木材の伐採に従事し相當の収入ありと云ふ。公所を辭し、附近耕地の狀態を視察す。部落は各縣別に分れ、病院、小學校など相當なもの建設せられ居れり。共同宿所にて晝夕食の厄介になる。牡丹江行きの汽車は二十三時五十三分發なれど、道路悪しく電燈なければ、早めに停車場に行く。細かき雨降る。驛待合室の扉を開きて入れば、石油ランプの光微にして室内判明せず。造り付けの狭き腰掛には厚き



外套らしきものを着たる労働者横はれり。室を出づれば、軌道までの間に廣場ありて暗し。驛長室も亦光微かなり。居るにところなく、且つ無聊甚し。待つこと久しくして闇黒を破り煌煌たる光を放ち佳木斯方面より先行装甲車近づき來る。驛の洋燈を稍明るくす。やがて普通列車來り乗る。

ぬば玉の闇の廣場の夜更ちて深きしじまに汽車待つ久し

彌榮驛より數里の箇所山金の産地あり。吾等は開拓士諸君が長く今日の如くその重大使命を自覺して邁進し、他日決して一攫千金の夢に誘惑せられざるやう窃に希ふものなり。(因に云、山金の産地にては山間の土砂を掘りこれを水洗ひして金の細粒を採集す。)

\*

九月十一日 晴、朝起き出づれば、何事か起りたる氣配す。聞けば、寢臺に居る間に靴を盗まれたる乗客ありと云ふ。暫らくの間、各種盜難譚にて賑ふ。列車は今、山岳地帯を疾走中にして途中驛には林口、楚山、寶林、五河林、柴

河、樺林などの名あり。十時過ぎ牡丹江驛につく。ここは濱綏線と圖佳線と交又せる重要驛にして、東は滿ソ國境なる綏芬河に、西は哈爾濱に、南は鮮滿國境なる圖們に、北は佳木斯に連る。驛舎は堂々たるものにして驛前に廣大なる廣場を有す。ホームにては三兵汁(御飯付)、饅頭、善哉、ビール、サイダー、正宗等を販賣し、内地化せる點少からず。

降り立てば饅頭善哉などりりて内地めけりとそちこちを見し

驛前の大和ホテルに入り小憩の後、市内の見學をなす。當市は滿洲事變を契機として一大飛躍を遂げ、行政、經濟、交通上、東滿唯一の重要地點となれり。當市は東、西、北の三方を山脈により圍繞せられたる盆地中に位し、目下大規模なる計畫の下に都市建設中なり。従て至るところ活氣横溢せるを覺ゆ。なほ街頭の邦人を見るに、吾等が今日迄通過せし滿洲國內都市中にてこの地が最もよく板につき居るものの如し。恐らく朝鮮に近きこともその一因ならん。公設市場に至れば、日用品、食料品は何にてもありて内地と異らず、例へば茹蛸、

生鮎の如きものまで見えその價も法外ならず。

\*

九月十二日 晴、朝十時半過ぎ牡丹江驛を出發す。圖佳線により牡丹江流域を南下し寧安、東京城などある寧安盆地を過ぐれば線路は漸く登り坂となり、鹿道を経て老松嶺に達す。嶺は海拔九百米にして松、杉、樅、白樺等の巨樹車窓近くより立てり。ここは牡丹江と圖們江支流との分水嶺なり。鐵道線路は隧道ありてループ式となれり。駱駝山、汪清など地形に關係ある驛を過ぎ十八時半圖們につく。沿線には畑あり、水田あり、山水の風光内地に彷彿たるもの少からず。

朝鮮の人のつくれる水田をあまた見て過ぐ山かひにして  
渤海の使節もここを通りしかと窓の外なる景色見てをり

圖們は鮮滿國境なる新興都市にして羅津、清津の海港に近し。約一時間ホームに於て休憩し、京圖線に乗り吉林に向ふ。

東京城驛の驛舎は宮殿の如き形式をなせり。驛より約一軒を隔てたる牡丹江畔の平野の中に渤海國の古都東京城の遺址ありと云へど、車中よりは見えぬ。この渤海國は往昔、奈良朝、平安朝の時代に繁榮し、吾國とも修交あり。その使節の往來すること二百年間に三十數回に及べりと云ふ。斯く使節の來貢せる目的は、政治的には吾國と結んで唐及び新羅を牽制し、他方には通商貿易を盛にするにありたり。當時、吾國は唐の文物を遣唐使、留學生、學問僧等により直接輸入したりと雖も、またこの渤海使節により間接に齎らされたるもの亦少からず。彼の使節と吾國文人との間に應酬せる詩賦により、吾が漢文學の發達に多大の貢獻ありたるが如きその一例なるべし。貿易方面に於て彼の船載せる主なるものに大蟲（虎）、豹、熊、貂等の如き獸皮あり。平安朝貴族はこの貂の皮の裘を愛用せり。甚しきに至りては、この舶來の皮の高價なる爲めに産を破りたるハイカラもありたりと云ふ。先年、東京城の遺址發掘を行へる際、渤海時代の甌瓦の間より奈良朝の吾が銅錢『和同開珎』を獲たりと云ふ。

\*

九月十三日 時々小雨、五時吉林につき、名古屋ホテルに入り休憩の後、市

の内外を見學す。市街は第二松花江の左岸に沿ひ後に山を負ひ、滿洲に於て稀に見る風光明媚なる古都なり。今は政治、交通上重要な地にして、製材、燐寸等の生産行はれ、煙草、藥種、毛皮等の取引盛んなりと云ふ。

第二松花江堰堤工事見學の道すがら小白山に上る。小雨降り人稀なり。山は樹木繁茂し、頂きに長白望祭殿あり。春秋に吉林將軍が長白山神を遙かに祭りたる所なりと云ふ。長白山（一に白頭山とも云ふ）は清朝發祥に由緒あるところなればなるべし。今、祭殿に立ちて遙かに南の方を望めども、雲山を遮りて見ること能はず。

松花江のみなもと傳ひ眺め居れば長白山は雲とぢて暗し  
だしぬけに森より出でて來し男輩を買へと手の籠しめす

吉林の上流約二十四軒の地點に在る大豐滿の堰堤工事場に至る。この地點は第二松花江が山嶽地帯より將に北滿の大平野に展開せんとする天然の咽喉なり。この大關門を利用し、コンクリート堰堤を築造して河を締め切り、洪水時に於

ける河水を貯藏して人造湖を作り、これを調節して一ケ年間略ぼ同一の流量を保たしむるを目的とす。斯くするとき下流約十六萬町歩の地域は洪水の厄を逃れ、肥沃なる可耕地となる。また他面、河水の流量年間一定となるべきを以て舟楫の便大に増進すべし。更に堰堤に於ける落差を利用し、水力發電を併せ行ふ計畫にて、これ亦工事中なり。この人造湖の面積は近江琵琶湖の約七割なりと云へば、その規模の雄大なること想像するに餘りあり。

天地の法則のまにまに堰堤をすゑ琵琶湖に比ぶ湖作らむとす  
人はいま自然の力みちびきて十六萬町歩の田畑ひらかむ  
洪水をたたへたくはへ稲りる田にそそがむも人の力ぞ  
田畑拓きなほその上に電氣をば起して國を富さむと云ふ

市内に歸りて北山公園に上る。山頂に立てば、吉林の全市街並に松花江の風光一瞬の中に在り。山頂には關帝廟、藥王廟、坎離宮、玉皇閣などあり。玉皇閣の門上には『天下第一江山』の扁額あり。今日娘々祭にて賑ふ。

人形をいとしき子らになぞらへて火に焼き幸を祈る祭ぞ

吉林の代表的街景として江沿街を推すものあり。行きて見るに、松花江に沿ひて遊歩道、車道、人道の並べる廣き道路を設け、その一側に西洋建築あり、殊に天王教會の尖塔の聳え立てるさまなど、相當風致上に意を用ゐたるが如し。ここを過ぎて或る上流邸宅に至り、主人の好意により内部を一覽することを得たり。更に商店街を見物す。滿洲旗人の多き都なれば古本なども相當あるべしと考へ、滿譯菜根譚を捜せども無く、漸くにして滿譯四書を購入す。この古本屋は甚狭き店舗なるが、亭主は賤からず、文字ある者の如し。

十七時過ぎ吉林をたち新京に向ふ。雨降る。吉林より一時間餘りのところまで山あり。山に樹木あり。これより平野となる。二十時過ぎ新京につき大和ホテルに入る。ここも雨降る。

\*

九月十四日 晴、朝九時半新京をたち、十三時五十分奉天につき、大和ホテ

ルに入る。今回の旅行は滿洲を見學したる後、北支に至り、更に蒙疆なる大同炭礦まで行きたき希望を以て東京を出發せり。然るに水害にて天津地方、八達嶺に於て列車不通となり、豫定の如く旅行を繼續し得るや疑問を生ずるに至れり。本月に入りてより屢々關係方面へ聞き合せたれど要領を得ず。昨夜新京に於て聞きたるところに依れば、天津地方は今猶不通なれど熱河を経由すれば北京まで汽車にて到達し得べしと云ふ。何れにても行けるところまで行く覺悟を定め、今奉天にて聞けば、熱河經由は不通にて、天津地方經由にて北京行の切符を賣ると云ふ。即ちこれを購ふ。

北京行の切符を買ひて手にもちてりなるの如く喜びし吾

前回見残したる箇所を見學す。城壁に接する小盜兒市場に至る。ボール・ペヤリングの古物を集めて組立て居る長屋あり、インチキと云へばそれまでなれど、感心すべき點なきにあらず、紙巻煙草の再生を街頭にて行ふもの二、三あり。今日は奉天神社の宵祭にて奉天銀座は内地人にて大に賑ふ。

九月十五日 晴、朝八時、奉天をたち、一路北京に向ふ。畑の中の處々に小川の如きものあり。路なりと云ふ。路は平坦なる野原に在りて殆んど勾配なく且つ概ね畑より低ければ、雨は集り來りて水の流れ去るに由なく、唯地中にしみ込むか蒸發するを待つのみなり。斯くて路は淀める小川となり畑の中を縦横す。

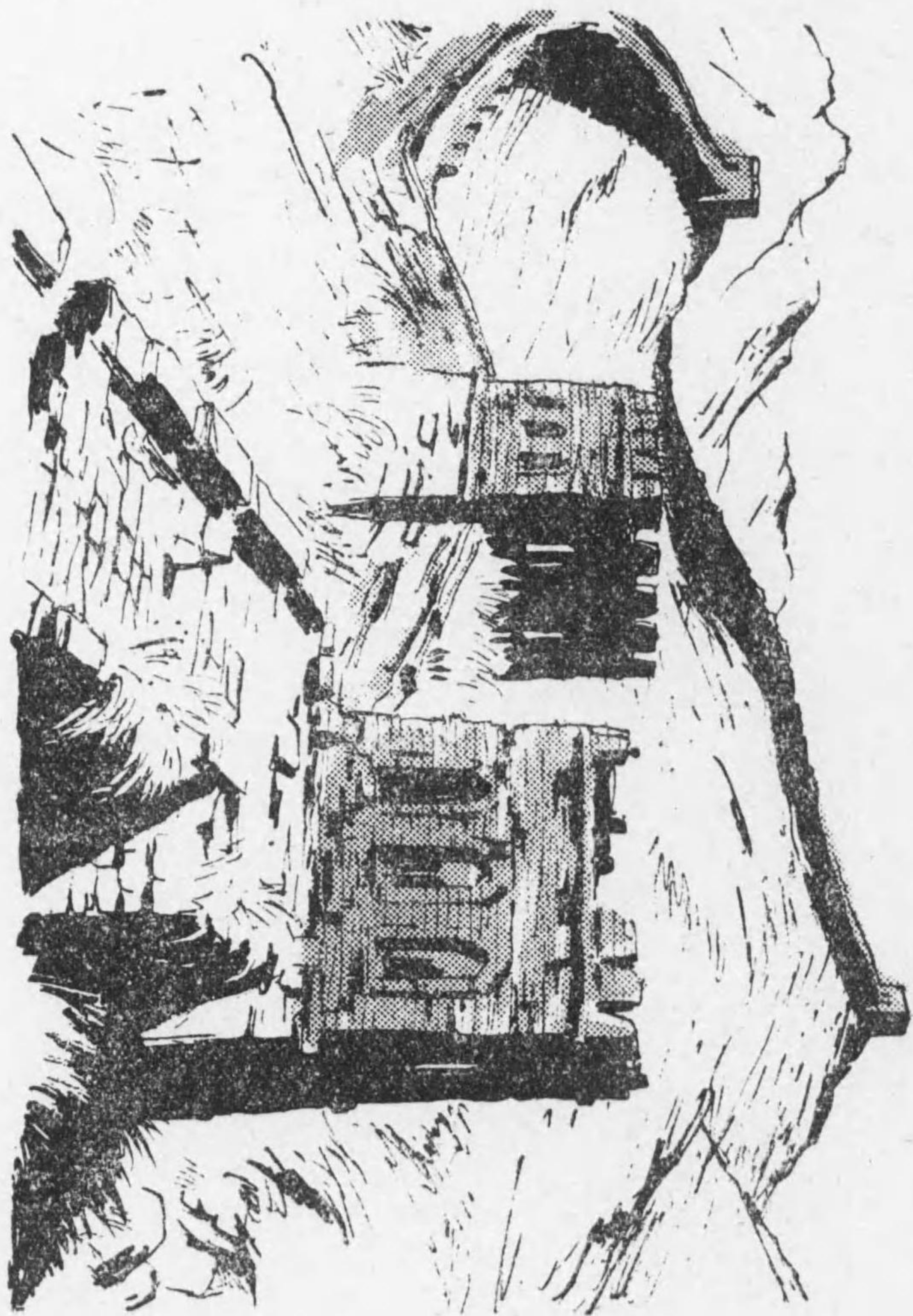
平なる廣野に雨のしき降れば路は川となりて淀み濁れる

今、吾等の乗れる奉山線の各驛の驛名標はその表面が線路と直角になるやうに立てり。これを平行とするも直角とするも何れも理由はあるべし。されど吾等は平素馴れざるにより奇異に感ず。展望車には吾等の外に日本人二人と外人夫婦らしきもの二人とのみなり。

正午過ぎ錦縣につく。ここは熱河省承德へ行く分岐點なり。阜新炭坑の關係者らしき二人の日本人下車す。

右方の車窓より山見え、近づき來れば山頂に萬里長城見え、漸くにして山海

長城の秋 八達嶺



關驛に達す。

秋の陽のかたむく空にそびえ立つ山の秀傳ふ萬里の長城

この驛にて三十分停車す。税關吏の検査あり。各自所持の金額を申告して兩替をなす。

ぜに替ふる人らならびて列をなす山海關に秋のかぜふく

山海關を過ぎて中華民國に入る。風物頓に異なるものあり。よく耕されたる畑に水田交はり、一般に樹木多く、松樹を植うるもの珍しからず。

日暮れたれば假睡をなす。天津附近に至れば、線路の兩側に水漚へ居り、列車は徐行す。午前二時北京につき、佐藤君に迎へられ北京飯店に入る。道すがら樓上高く大文字にて『打倒英國』と電飾しあるを見る。紫禁城の前門たる天安門なりと云ふ。

九月十六日 晴、正午過起き出で、金子君の案内にて北京の西郊なる萬壽山見物に向ふ。自動車は城門を出で、畑の中の大街道を走る。兩側に楊柳の並木ありて續く。一般に樹木多し。豪華な宮殿式の燕京大學鬱蒼たる樹木に包まれたる清華大學などの前を廻り道して萬壽山離宮につく。

ここは古より清朝の離宮にして、嘗て英佛聯合軍の北京侵入に方りその一部を破壊せり。明治二十一年頃、西太后が海軍擴張費の大半を流用して大改築をなし、名を頤和園と改め、好んで駐蹕し垂簾の政を執りたる所なりと云ふ。

袁世凱が戊戌政變をおこさむと密に謁を乞ひたる所

山は高からず、樹木ありて繁れり。山麓に昆明湖あり、江南の風景を模したりと云ふ。湖畔より山頂にかけて幾多の金殿玉樓散在す。普通繪葉書に見る山の中腹より巍然として聳ゆる六角三層の樓閣は佛香閣と云ふ。閣より左右數十段の石段を下れば耕雲殿あり。殿の前方に耕雲門、更に前方、湖に接して耕雲

門牌樓あり。今牌樓のあたりに立ちて見上ぐれば、低く小さき山に對し佛香閣は不調和なる程巨大にして、五色彩鮮かに眼を眩するばかりなり。耕雲殿の中に西太后遺愛の品を陳列す。國內は勿論、外國より献上せる珍寶少からざるべし。殊に時計の各種各様あるに驚く。この品の中には或る利權と交換せるものもあらんなど思ひつつ見て過ぐ。

長廊下天井の繪の一つ一つは遂に見ずして湖を見て過ぐ  
五彩濃き玉のりてなゆ眼うつせば湖のかなたに並ぶ楊柳  
湖の邊にわれはいこひて仰ぎ見る佛香閣に友ら上り行く

\*

九月十七日 晴、朝八時二十分北京をたち大同炭坑へ向ふ。野澤君を道案内として煩はす。列車は京兆の大平野を西北に向つて走ること約二時間にして、大行山支脈の麓なる南口站につく。ホームにて蒙疆の通貨と兩替す。南口を出づれば線路は三分の一の勾配となり、昔の居庸の嶮を登り行く。谿は狭く深くして水少し。山は樹木稀にして岩膚の露出する所多し。道路は谿底に沿

ひて嶮しく、過般の水害により崩壊せるところ少からず。斯かる難路を駱駝は意に介せざるが如く悠悠として下り居れり。車窓より見れば居庸の關門は左の下、深き谿の對岸に在りて、兩岸の山これに迫る。その兩側の嶮峻なる山に沿ひて萬里長城の袖は逆落しに下り關門に連なる。往昔、居庸關に尋いで上關あり、更に峠なる八達嶺の關門ありて、湖北の蠻族の北京に侵入するを防ぎたりと云ふ。元の成吉思汗も北方よりこの居庸關を抜くこと能はざりしと傳ふ、要害のほど思ふべし。

居庸關をひだり目下に見下して汽車上り行く嶮岨の峽を

列車は居庸、五貴頭、石佛等の隧道を過ぎて青龍橋の驛につく。ここは峠に近く、南口より約二十料の距離に在り、スキッチ・バック式なり。八達嶺の長城見物はこの驛より下車して行く。驛に立ちて見上ぐれば、長城の壁は長く山の尾根を傳ひて空の彼方まで續くものの如し。

長城を築きし山々かくばかり嶮しきものとは思はざりにし  
嶮しきは嶮しきままに山なりにきづきわたせり長城の壁

ホームに詹天祐の銅像あり。彼はこの鐵道を建設せる技術者なりと云ふ。因にこの京綏鐵道のみが支那に於て外國借款によらず自國人の手により築造せられたる唯一のものなり。

青龍橋驛をたち、八達嶺を過ぐれば眼界頓に開け、列車は懷來の盆地に向ひ下りつつあり、右の方、小高き樹木なき山に羊、駱駝の放牧せるを見る。

懷來の盆地に至れば、桑乾河流れ、平坦なる耕地續き處々に楊柳の並木あり。西すれば宣化の盆地あり、更に西すれば大同の盆地に至る。これらの地域は南は八達嶺に續く所謂内長城の走る山山により遮られ、北は所謂外長城の走る陰山山脈により遮らるるが故に、盆地なれども實は何れも五百米以上の中間高原なり。陰山山脈を北に越えたとところに所謂蒙古の高原はあるなり。

盆地の地表は黄土を以て被はれ、その厚さ幾何なるを知らず。平坦なる原野の中、處々に深くして幅狭き溝の如き谷あり。列車より覗き見るに、兩側は直



立せる絶壁にして悉く黄土層なり。深さ二十米もあらんかと思はるるものもあり。或る溝は底に畑あり家ありて、甚奇異なり。元來黄土中には垂直に細き管状の孔無数にあるも水平若くは傾斜せる層理の存すること稀なり。故に露出面の風化、水蝕せらるるに當りては豎に裂壊するの傾向著し。その結果として前述の如き幅狭くして深き垂直側壁を有する谷を生ず。黄土中には粘土分甚少く、その大部分は非常に微細なる礦物碎片より成れり。然もこれ等の細砂は新鮮にして分解し居らざる状態に在り。一方黄土中には多量の石灰分を含有するを以て水の存在によりこの石灰分は礦物分と容易に化合し可溶性となり植物生育の養分を生成す。然ればこそ漢民族は四千年の遠き昔よりこの黄土に執著し耕作し無肥料にて年々多量の收穫を擧げ居るなり。水さへあれば肥料となると云ふ實に結構なる土地なり。ただしこの水を制御すると云ふことが過去は勿論現在も未來も大問題なるべし。學問の應用すべき範圍實にここに殘存す。

見渡せば村落の家の屋根も壁もまた塀も黄土にて塗りありて大地と同じ色を呈し、遠方より識別し難し。家の周囲には白楊など植ゑあり。新墾の畑には蕎麥を植ふるもの多きは内地と異らず。懷來及宣化盆地には果樹園あるものの如

く、康莊、懷來、沙城、宣化などの驛には外見美なる葡萄、林檎を賣れり。今日は風少き方なれども、車窓二重硝子戸の隙間より黄土の微粉侵入し來り、咳を催すこと再三ならず。

陰山はいかしふる山膚くろく黄土くにはらに屏風なす山  
つと走り留りふりむく小きけもの兎は土とまがふ色せり

十九時半、大同驛につき城内に向ふ。城門にて一旦下車し、身分證明書の検査を受け内に入り再び車に乗る。

晋北ホテルに入る。このホテルの構造は今まで泊りたるところと異り、中庭を有する平家建煉瓦造なり。風呂場は日本流にして便所、洗面所と共に別棟となり廊下にて連る。部屋に寢臺を置く入口の戸締充分にしまらず。夜寒し。

眠りさめて廊下邊にきく微なる訝しき聲は守宮ならむか  
守宮かと思ひきめてもねつかれず時計を見れば午前二時過



佛石大崗雲

先日、奉天に於て北京行の切符を購ひ、甚しく喜びたる所以の一は北京を見學すること、第二は今日吾等が足を踏み入れたる蒙疆の地に來ることなり。この地に來る目的は主として龍烟鐵鑛と大同炭鑛とを見學せんが爲めなりと雖もまた他方に於て大同の石佛をも見物せんことを念願とせり。石佛は大同府城西方二十料の雲崗鎮に在りて、今を去る約千五百年前、北魏の全盛期に造られたる遺蹟なり。北魏は支那史上に於ては南北朝時代の北朝の一にして、この南北朝は秦、漢、三國、晋の後を承け、隋、唐に先行する時代なり。北魏の太祖道武帝が北支那の大部分を平定し、天子の旌旗を立てて自ら帝號を稱へたるは皇紀千五十六年にして我朝 仁徳天皇の崩御あらせられたる歳に相當す。元來、道武帝は北方遊牧の民たる鮮卑族の拓跋部族の代表者なれば、同族固有の移動生活を繼續すべき筈なれども、今や北支に覇を稱へ漢民族に君臨するに及んで更に君主權を伸長し永くこれを確保する爲めには勢ひ舊來の穹廬を捨てて漢民族の體制にならひ、都城を造營するの必要を生じたり。斯くて即位の後二ヶ年にして平城（今の大同）の地を卜し、これを國都と奠め、支那的城郭、宮殿、宗廟等の經營に着手せり。この都城の遺址は今猶城外に纔かに殘存すと云ふ。

北魏は第三代世祖太武帝に至り完全に北支一帯を統一したり。この世祖は太祖以來傳播せる佛教に對し大彈壓を加へたるも、高宗文成帝の立つに及んで再び佛教を採用しその復興を命じたり。加之、高宗は太祖外四帝の冥福を祈る爲め沙門統曇曜に命じ、平城の西方なる武州塞（今の雲崗鎮）の谿に石窟五箇所を造り各窟に大佛を安置したり。これ雲崗石窟の始めなりとす。開窟の時期は皇紀千百二十年より千百二十六年の間なるべしと云へば、我朝 雄略天皇の御宇に相當す。爾後上は國家帝室より下は貴族庶民に至るまで盛んに開窟、造像を營むこと約三十年、第六代高祖孝文帝が大和十七年（皇紀千百五十三年）洛陽遷都を決行するまで繼續せり。

現存せる石窟はその數頗る多く、大なるもののみにて二十を下らず。大石窟の内部構造は石佛尊像を中心とするものと、塔を中心とするものとの二種あり。窟の内壁には數限りなく大、中、小の佛像を彫刻せり。佛像は北魏人の信仰根源たる釋迦佛最も多く、これに配するに多寶佛、彌勒菩薩、觀世音菩薩を以てし、大日如來、阿彌陀佛の如き抽象的なる佛、又はこの世とかけ離れたる世界の佛は殆んどなしと云ふ。

石窟内佛像の數多きことを示す挿話あり。即ち昔唐の代に人あり、毎日一つ宛の佛像を禮拜して餘生を樂しまんと企てたりしが遂に一巡を終へずして死せりと傳ふ。

\*

九月十八日 晴、朝城内を見物す。華嚴寺と稱する上下二寺ありて、何れも支那に現存する最古の木造建築の一なりと云ふ。十時バスにて石佛寺に向ふ、西方約二十料の行程なり。バスは西門を出でて廣漠たる黄土の平野を走り西山の麓に至りこれより武州川に沿ひて遡る。川は流急にして水は濁れり。バスの屋根の上には蒙疆政府の兵士三名乗りて警戒す。天井數ヶ所に穴明けり、今春匪賊襲來せし時の手榴彈の痕跡なりと云ふ。氣味悪し。途中荷車に行き違ふ。何れも二尺角位の石炭塊を積めり。或る者曰く所謂大同炭礦の露頭より盜掘せるものなりと云ふ、眞か。十一時過ぎ雲崗鎮につき、石佛寺の門前にとまる。降りたるところは武州川に沿ふ稍廣き平坦なる耕地なり。この北方に屏風の如く高さ五十米にも達せざる低く平たき岡東西に廣がれり、これを雲崗山と稱す。この岡の南側なる砂岩の絶壁に大、中、小幾百千とも知れざる石窟を蜂の巢の

如く穿ちあり、僅々三、四十箇年間に斯くも夥しく築造せるものかなと驚歎す。



第一群 第二群 第三群 第四群 第五群 第六群 第七群 第八群 第九群 第十群 第十一群 第十二群

第十三群 第十四群 第十五群 第十六群 第十七群 第十八群 第十九群 第二十群 第二十一群 第二十二群 第二十三群 第二十四群

第二十五群 第二十六群 第二十七群 第二十八群 第二十九群 第三十群 第三十一群 第三十二群 第三十三群 第三十四群 第三十五群 第三十六群

第三十七群 第三十八群 第三十九群 第四十群 第四十一群 第四十二群 第四十三群 第四十四群 第四十五群 第四十六群 第四十七群 第四十八群

石窟は圖に示す如く岡の崖の切れ目により東、中、西の三群に分れ東端より西端まで二料以上もあるべし。東より數へ第一乃至第四は東方群、第五乃至第十三は中央群、第十四乃至第二十は西方群なり。尙西方群の西方にも幾多の中等大の石窟あり。今寺門に進むに左側に直徑一米もあらんかと思はるる白楊の大樹一本あり。尙進めば門に吾が兵士ありて警備す。この地は雲崗鎮と稱する如く鎮城ありたるところなり。岡の上には各方面に通ずる烽臺點在せり。ここ

は往昔武州塞と稱へ、漢以來今日に至るまで軍事上邊疆警備の地たり。門前に制札二様建てあり、一は日文、他は華文なり。華文制札には

警告

石佛寺古蹟皆爲中國重要名勝日本軍爲保存友

邦之重地起見特加保護倘有損毀者射殺不貸

昭和十三年一月十六日

大日本軍雲崗鎮警備隊

の如く記しあり。

千年經しこの御佛を永遠につたへまつらくと日本軍護る  
廣まへの白楊の一本ふとき木に烏むれさわぐ秋の眞晝を

石佛寺と六朝風に誌せる扁額を仰ぎ、山門をくぐりて奥に進めば、入母屋造りの木造四層樓二棟並び立つ。何れも樓後は大石窟に連なり、一雙窟をなす。右は第五窟なり、高さ五丈有餘の石佛坐像を中心とす。左は第六窟なり、中央に方柱ありて塔をなす、方柱は上下二層に分たれ、上層四隅に九層塔あり、塔

の中間に佛像あり、下層四面にも佛像あり。この第六窟の周壁には釋迦一代記の浮彫あり。

釋迦一代記（六首）

現し世の争ひごころ胸にみち弓張りたたす太子のすがた  
乙女らの酒に酔ひ痴れし状見つつ思惟しおはす太子の姿  
市に出でて世の諸人の苦しめる實の状を見たまふすがた  
さにづらふヤシユダラ姫の寢る間に世をば捨てむと惱める姿  
出家する太子と馬とを支へつつ空はこび行く天人四たり  
カンタカラを別れ繁みたつ森中に苦難行ずる太子のすがた

第七窟及第八窟も亦一雙窟をなせり。然れども第五窟の如き中心となるべき大佛像なく、周壁に多數の佛龕あり。高宗の造營せる雲崗最初の五窟は第十六乃至第二十にして巷間に流布せる大露佛は第二十窟に屬するものなり。吾等は佛像の手法その他に關し茲に詳記すべき智識なきを遺憾とす。ただ大露佛その他に就いて見るに現實の人間に接するが如き感あり。恐らく北魏人の面魂を傳

ふるものなるべし。見つつ過ぎ行くに往々時代的にも相貌的にも調和せざる感を生ずる塑像あり。支那の他の地に在りては石窟、塑像を本位とするところある由なれど、この雲崗は然らず、石窟、石像を本位とするところなれば、上述の塑像は後世の重複に係るものならん。著しく俗悪と思はるるものもあり。

第十一窟に大和七年(皇紀千四百四十三年)と誌せる造像記あり。

若や又この世の人と生れなば八難救へと禱みしこのふみ

第二十窟大露佛

奮ひ起ち國をおこせる魏の帝の面わに似しやこれの御佛

雜詠

手向けむに花一つなく水もなし秋陽もれさす佛のみまへ  
千年経て風に散も虫食まれ佛像の地際りすれ消え行く  
秋空は澄みて翳なし吾は今石窟を出でてまたつぎに入る

雲崗鎮は戸數四、五十と見ゆる一小村落にして、石窟西方群の前方に在り、

農耕を營み居るものの如し。

農夫等は穀物を入れ知らず知らずこの石佛を護りしと云ふ

見物に二時間餘を費し、同じ道路をバスにて城内に歸り、更にハイヤにて市外西南二十七軒なる永定莊炭坑に至り見學す。

地圖を指し断面圖を指し説きてゆく副坑長のたふとき話  
幾百億幾千億礎と云はむより無限にありと結論す君は  
容易く口には云へど如何にして掘りて運ばむ無盡藏の炭

往復とも廣漠たる黄土の原野を走る。道路悪しきこと甚し。畑中に戦歿勇士の墓標淋しく立てるところあり。謹んで黙禱をなす。

新墾の畑にまばらに咲く蕎麥の短き莖のくれなるゆるる

夜に入りて大同を出發し、夜半張家口につき、福榮旅館に入る。

九月十九日 晴、朝、張家口をたち、宣化に下車し、龍烟鐵鑛株式會社に至る。鑛山は約八軒を隔つる水磨に在り、見學す。宣化も亦城壁を以て廻らしたる古き町なり。街の到るところに『日察如一』『民生向上』『剷除共黨』の如きビラ貼付しあり。

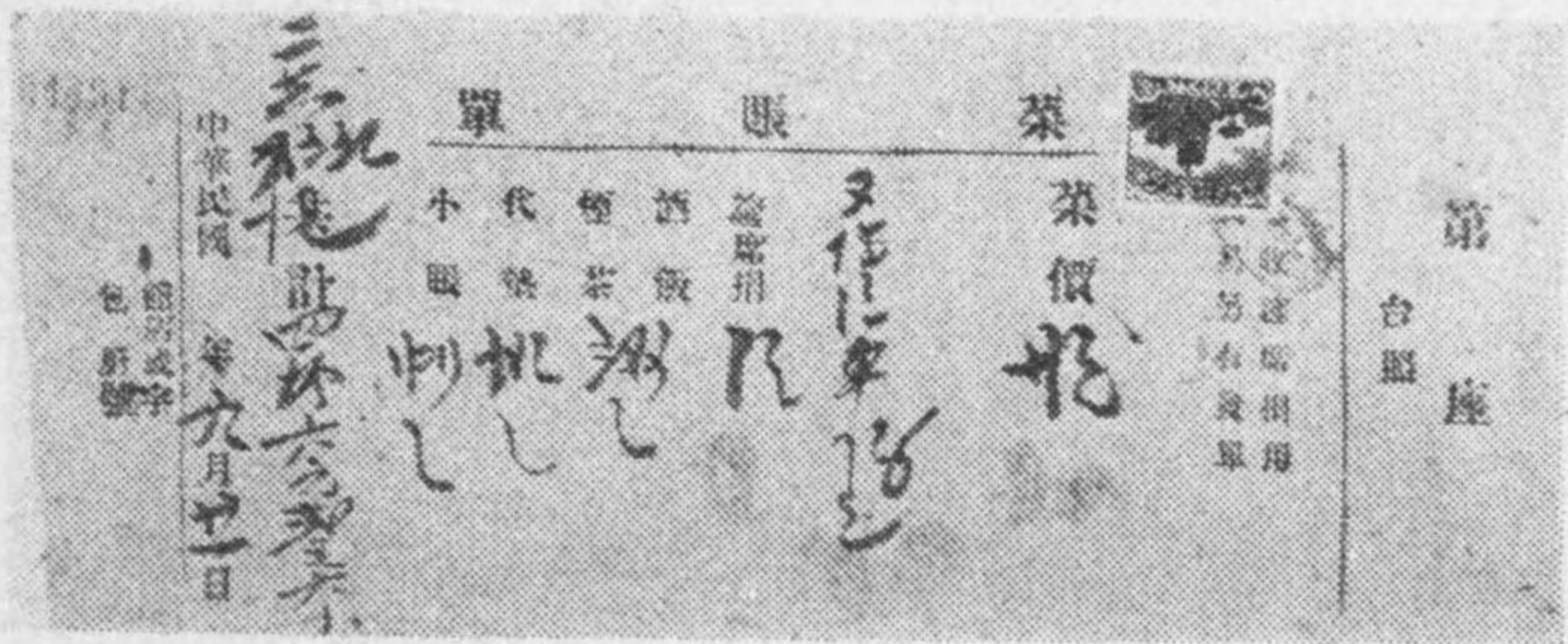
停車場美化

野も家も黄にいろどれる國原の驛えきのホームに赤き花咲く  
ホームには草花赤く咲きさかり蒙疆の驛々吾われをなぐさむ

十五時過ぎ張家口に歸る。鐵道の建物の妻にⅠ、Ⅱ、Ⅲの如き數碼じふま（數字のこと）を記しあり。Ⅰは六十一、Ⅱは六十二を示す。この記號法に就き錢寶琮に從へば數碼の沿革は次の如し（錢寶琮著古算考源、記數法源流考、參照）

象形數碼	縱式	一	二	三	三三	三三三	丁	丁丁	丁丁丁	〇
	橫式	一	二	三	三三	三三三	上	上上	上上上	〇
簡易數碼	縱式	一	二	三	×	〇	丁	丁丁	×	〇
	橫式	一	二	三	×	〇	上	上上	×	〇
習用數碼(暗碼)	一	二	三	×	〇	上	上上	×	〇	
	一	二	三	×	〇	上	上上	×	〇	

象形數字より簡易數字を経て現用の習用數字（暗碼は符牒と云ふほどの意）に至る経路をとれり。支那に於ては先秦の古き昔より數を數ふるに籌を用ゐたり。籌はまた策とも云ひ或は算とも云へり。古書に『木の細枝を策となす』『算は長さ六寸にして曆數を計算するものなり』『その算法は竹を用ゆ徑一分長六寸』など云ひ、細き棒を並べて數を表したるが如く思はる。その並べたる形狀を寫して數字となしたるが即ち、籌制の象形數字なるべし。就中、四及び五の數字は書くに不便なるを以て、之を改めて習用數字に於ける如く變形せるものなる



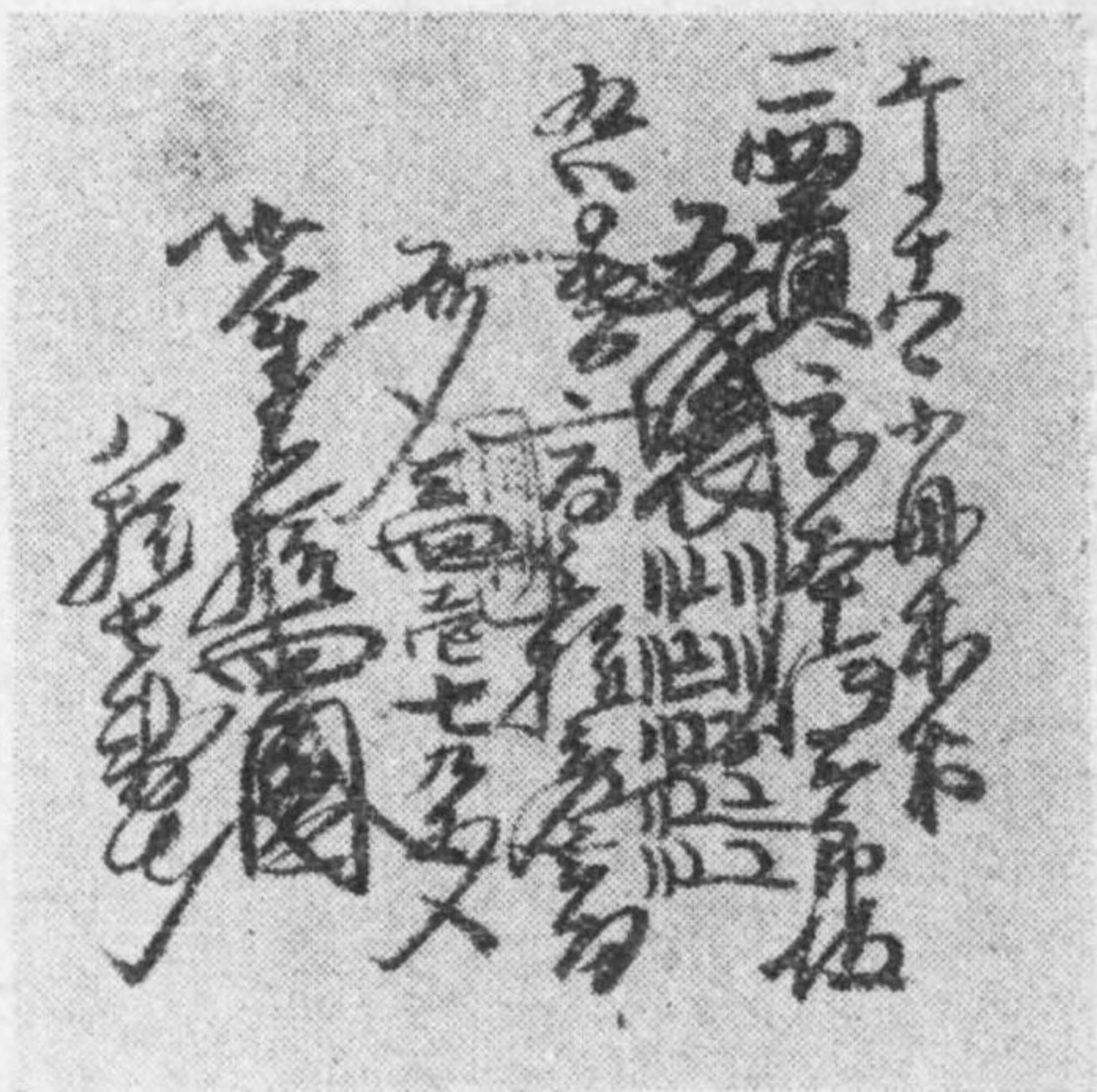
べし。

北京にて手にせる領收書の中にもこの系統の數字を用ゐたるものあり。圖はその一例なり。

圖中、筆にて記入せるものが數字なり。右より菜價の下が二〇元、次が一・五、一・〇、七・四四、一四・一(一四・六の如く思はるれども上の如くせざれば計と合はず)、二・二二、共計四十六元二六を表す(共計上部の數字は四十六元六六の如く思はるれども計算合はず)。

この系統の數字は吾國にも古より傳はり居りたるが如く思はる。圖は千葉縣銚子港雜穀商灰吹屋號商店の明治卅八年に使用せる賣掛帳の一部なり(淺川貞治君の好意により入手せるもの)。

十一月十八日西貢米五袋を渡せる記録にして、籌制數字は各袋の重量を示す。即ち上より二六・二、二七・



三、二六・五、二六・七、二六・六貫を示し合計百三十三貫三、楯目に換算して三十四石一斗七升九合五勺、この代金三十四圓八十七錢七厘なれば、一升到付約十錢二厘となる。明治三十八年日露戰役當時の外米値段と今日の値段とを比較し甚興味あるを覺ゆ。

張家口鐵路局に小野寺君を訪ひ久瀾を謝す。同君の案内にて張家口都市計劃の一部、外長城の外なる蒙古の入口、毛氈

製造場などを見學す。

張家口は海拔八百米以上の高原に在り、古來蒙古に對する要害の地にして、また蒙古との貿易の中心地なり。日支事變の勃發するや察南自治政府樹立され、本月一日、蒙古、察南、晋北の三自治政府を統合して蒙古聯合自治政府を建つ



るに至り、その首都となれり。ここに限らず、大同にても宣化にても蒙古聯合の管内に於ては邦人に對し、親しみを感ずること濃厚なり。

福榮旅館にて

砧打つ音にはあらず夜もすがらかそかに響く法華の太鼓

\*

九月二十日 晴、朝蒙古聯合自治政府に至りたれども、面會を乞ふ人在らず。若き事務官より懇切なる談話を聞く。繁華街を見物し土産物など購ひ十一時半出發北京に向ふ。十五時八達嶺を過ぐ。仰ぎ見れば秋の陽は長城に照り耀けり。

八達嶺の單線を電化しなば如何にかはると考へて居り

石一つ背負へる苦力は右左眺めつつ居り歩むともせず

十八時半、北京につき北京飯店に入る。夜、新々大戲院にて芝居を見、更に他の寄席をも覗く。

九月二十一日 晴、昨夜蒙疆の旅行より歸り、今朝久し振りにて東京の新聞を讀めば、去る十六日東京高速鐵道開通せる旨の記事あり。

五日ぶりに新聞を見れば喜ばし高速鐵道開通せしと云ふ

かにかくに思ひ浮ぶること多し高速鐵道の開通の状態

去日萬壽山方面に赴きたれば、今明兩日にて残りの部分を廻る。斯く三日足らずの期間に於て一通り北京を見學せんと企つることは無理にして紫禁城だけにても三日間に亘らざれば見物出來ざる仕組なり。

北京の位置は所謂中原平野の最北端に在りて北緯四十度、東經百十六度に位し、新義州及び咸興と殆んど同緯度、秋田及び盛岡の稍北方に相當す。現在の北京城はこれを内外の二城に分ち、何れも東西及南北に亘る高き城壁を以て圍繞し、北部を内城、南部を外城と稱し、各築造年月を異にす。而して王宮は内城の略中央に在り。

城壁は磚テヤンと稱する灰黑色の脆き煉瓦にて築き、内城は高さ三十五尺餘、壁根の廣さ六十二尺、壁上面の幅五十尺にして外城は高さ二十尺餘、壁根の廣さ二十尺、壁上面の廣さ十四尺なりと云ふ。以てその規模の大なること想像するに難からざるべし。

北京が初めて王城となりたるは今より九百年以前の遼の時代にして南京と稱せり。ついで金起るに及びこれを擴張し燕京と稱せり。元の世祖、忽必烈クビライは蒙古より來り燕京の東北に大規模の都城を築造し、これを大都と改稱し蒙古帝國の首都と奠めたり。時に皇紀千九百二十四年なり。

今日の北京の内城は明の成祖が今を去る五百八十餘年前の永樂年間に築造せるものにして、外城はそれより約百三十年後に竣工せり。現在の紫禁城は元の宮殿より稍東方に位すと云ふ。清朝は明の故宮をその儘繼承し一部改築を施したるに過ぎず。

過般、大連へ渡る船中にての話に、北京は見る所多ければ専門の案内者を雇ひて廻ることが良策なりと聞きゐたれば、ツーリスト・ビュローに依頼し適當なる人を得たり。斯くて天壇、雍和宮、孔子廟、北海公園、紫禁城、東安市

場などを廻る。北京の風景は映畫にて内地に紹介せられ居り、吾等も見たることあり。今その風景に直面して映畫の記憶新なり。

紫禁城にて

ものなべて大をたふとぶ國柄クニガタのその一つかもこの紫禁城シヤンジン足はやに打ち見つつ過ぐひろき庭大いなる門大いなる殿黄に碧に朱に色どる殿堂の幅よりもひろし白き大理石段踏む歩道にわたせる橋に階段に眞白くひかる大理石はも後宮の哀話ききつつ見て過ぎぬ香妃の風呂を珍妃の井戸を秀吉が九月の節句もよほさむとふみにのこせる城はこの城形もて人おどさむときづきけむこの大城のぬしは亡びし明ほろび清もほろびしいやはての王なき城にただ秋の風ここに來ていよよ畏し東海の一系のみかどしらしめす國

因云、清の乾隆帝が西方親征の際、回教王族を捕虜とし北京に連れ歸り、順

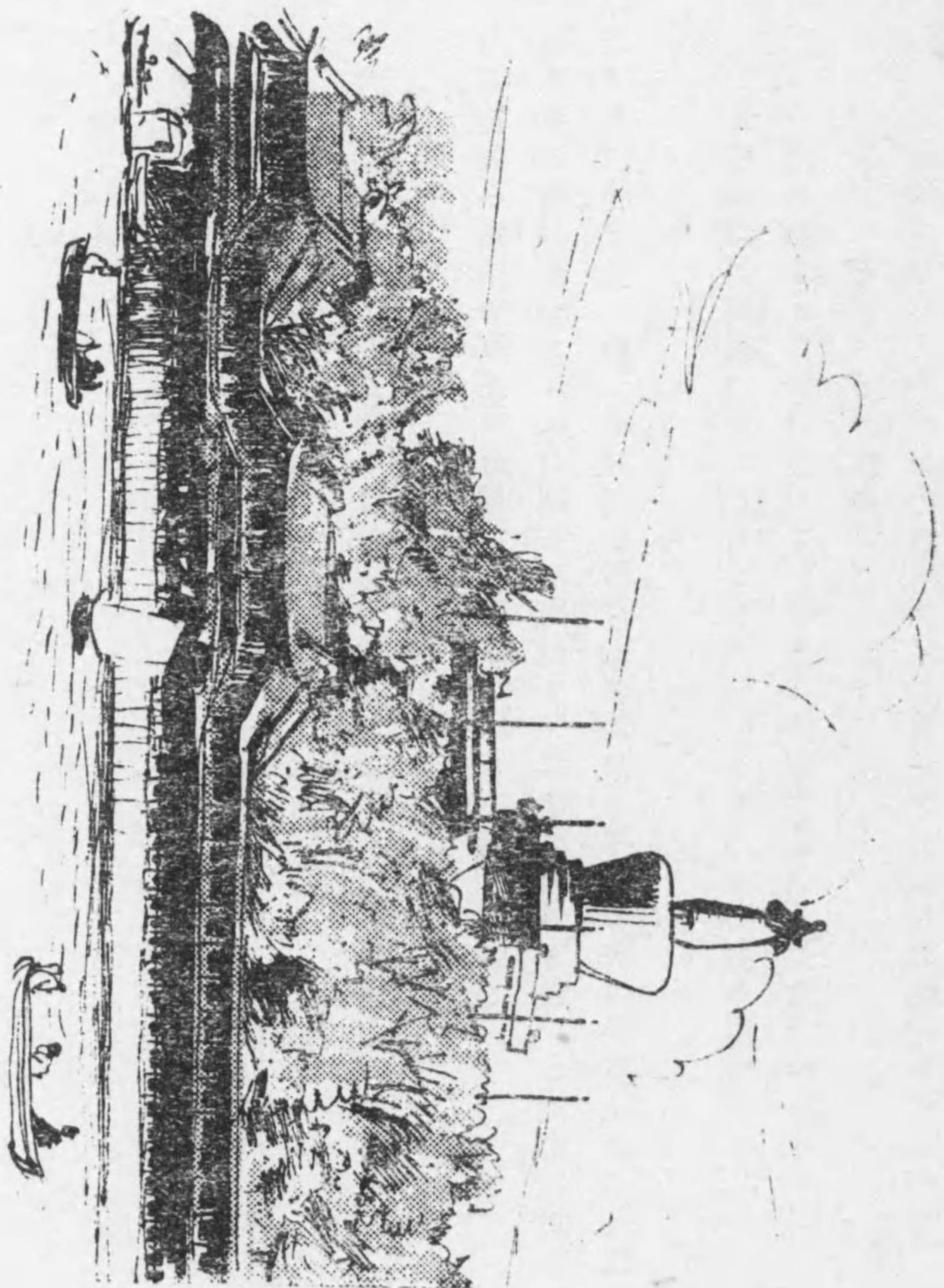
治門内に邸宅を興へたり。而してその王族中の美貌なる一王女に香妃の名を賜ひ、後宮に迎へたれども、妃は大清帝國の王者の權威にも屈せざりし爲め遂に縊り殺されたりと云ふ。乾隆帝はこの香妃の爲めに白色の煉瓦にて疊めるトルコ式浴室を作り浴徳殿と名づけたり。今も猶存す。また貞順門前に珍妃井と云ふ井戸あり。庚子の役に西太后が逃げ出す際、光緒帝の寵妃珍妃をこの井戸中に突き墜し溺死せしめたりと云ふ。

\*

九月二十二日 晴、午前盧溝橋に赴く。午後瑠璃廠に至り、骨董店を見歩き、陶器のよきものを見つげんとすれども一物も得ず。無知なる吾等には、本ものなれば安きに過ぎ、賈ものなれば馬鹿馬鹿しく高きに過ぐるの感を生ずるもの少からず。従つて遂に買ふことを得ざりしなり。

東京本社より調査特別事項の電命あり。木下君、明日より調査に従事することとす。

北京雜詠



北京北海公園 白塔を望む

洋車ヤンチヤウに呼びかけられて行きずりに耳をすませば日本語なりし

(洋車とは人力車のことなり)

秋の陽ひをまともひにりけてくつきりと森の上に立つ白塔バイタクの白しろさ  
瑠璃廠ルリヤンに陶器テウキあさり一日してとびつくばかりの物に出會はず

\*

九月二十三日 晴、今日この地を去るに當り早朝ホテルの屋上に上り展望すれば森の都は今秋と云ふに綠猶ほ濃こほろなり。紫禁城はほど近くして木の間より見ゆる宮殿の屋根は黄色に重疊し、朝暾に輝きて眼下に在り。

たたなはる夢見いんかおろし吾が立てる北京飯店ペキヤンの朝の屋上

午前、華北交通會社に赴き十三時四十分北京車站を出發す。同行の木下君は社用にて兩三日滞在することとなりたるを以て吾等一人にて天津を経て奉天へ向ふ。

折もあらばまた訪ひ來むと吾とわが心に云ひて北京去り行く

去十五日來りたるとき夜間なりし地方を今日は晝間見て過ぐ。内地にて想像し北京・天津間は恐らく東京・横濱間か大阪・神戸間の如き處なるべしと思ひるたるに、現場は著しく相違し、所謂京兆の大平野なり。その距離もまた百四十軒に達す。

約一時間半を走りたる頃より洪水のひきたる跡見ゆ。更に走れば見渡す限り一面の茶褐色を呈せる泥の原野より渺茫たる濁水の原野となる。停車場附近には高きところ少々あれど、遠ざかるに従ひ人家の浸水せるもの多し。天津郊外も浸水せるところ多し。天津を見學するには特別の許可證を必要とする由なれば下車せずして過ぐ。

漲りて濁れる洪水の中にだに流れ筋あり河にやはあらぬ  
空低く家鳩あまた群れて居りそのあるものは窓近く飛ぶ  
濁り水漲るかなたに森ありて人の住むにか家むらも見ゆ

假桁の下をたぎちつつ流れ行く水勢防ぐと土俵積み居り  
漂へる洪水に船浮べ四ツ手網見守る人のこともなげなる  
停車場人たかりゐてさりげなく汽車眺め居り大國民と云ふか  
汽車の窓に何か喚きて物乞へる支那の子供は犬よりも汚し

犬は屢々水浴するならむ、その毛並綺麗に見ゆれども、群れ居る乞兒は然らざるが如し。

塘沽を過ぎて約一時間、蘆臺附近に至れば洪水全くなし。この附近一帯、長蘆鹽の産地なれば窓外に鹽田多く見ゆ。鹽の堆積せるところあり。浸水せる鹽田少からず。(因云、今日通過せし洪水地は約百三十軒の範圍に及べり。)薄暮、炭坑地帯なる唐山を過ぎ、夜半、山海關につき税關の検査をうけ、また兩替をなす。

\*

九月二十四日 晴、朝奉天につき直ちに乗換をなして大連に向ふ。約一ヶ月振りにて同じ線路を南下しつつ遼陽附近に至れば高粱はこの期限に成熟し、悉

く刈り取られ、窓外の野色一變せり。

鐵道に近きところを豚の一群を追ひつつ行く者あり。遼東の豚と云ふ諺もある位にて、その色は黒なり。歩み行く様を見るに足は案外達者なるものの如し。

黒き豚許多牽て行く人のあり足なが小豚はしりさきだつ

十三時三十分、大連につき大和ホテルに入る。二十六日發の船にて上海へ行くこととなりたるを以て荷物を整理し留守宅へ送る、中支は氣候溫暖なりと思ふが故なり。夜、手紙を書く。

滿蒙と北支の旅を今日終へぬと便り書き居り繪葉書にして

繪葉書の繪をえらびつつ宛人をとほくしのぶも旅の心か

\*

九月二十五日 晴、今日一日は行かねばならぬ豫定なし。東京出發前、小平社長より申されたるは、時々一日位宿に在りて見學其他何事もせず靜かに休養

すべしとのことなれども、吾等は未熟にして斯かる境地に達し居らず、じつとしてゐること苦痛なれば、今日も外出す。甚慚愧に堪へず。

午前、再び滿洲資源館に至り、尋いで滿鐵中央試験所を見學す。午後は南滿洲硝子株式會社に至りカットグラスの細工場を見學しクリスタルグラスを購ふ。

亞米利加の旅にも然りき今も亦切子玻璃器を家苞に買ふ

手にうけて軽くはじけばカットグラスの餘韻はいよよ澄み透りゆく

尙時間ありたれば竹内黙庵氏の木魚庵を見物す。蒐集せる木魚彫しく總數千二百に達し、日本製、支那製、滿洲製、朝鮮製のものにして素朴なるもの精巧なるもの大小多種多様なり。その古きものは八百年以前に及び、僧榮西が宋より將來し筑前博多に保存せられしものもあり。黙庵氏の研究によれば、木魚は梵鐘の形狀を轉化せしものなりと云ふ。

\*

九月二十六日 晴、今日こゝを出發する豫定なり。先月末、始めてこの地を

踏みてより約一ヶ月の間に北は滿蘇國境の黒河に至り、西は蒙疆の大同炭山に至れり。今去るに望み、感慨なきにしもあらず。

正午出帆、大連丸にて上海に向ふ。船室は定員三人にて満員なり。特別室に移る。明朝はまた他室に移る由なり。秋田君其他の周旋にて船長始め船員の厄介となること多し。

遠ざかる甲板に立ちて想ひやるはダルニーの昔大連のいま  
來しときのおぼろの街も明らけし彼の岡は何彼の家は何と

大連灣を出でて渤海に向へば波あり。十九時前に日没す。十九時半頃より山東角の燈臺見ゆ。波漸く高し。

船揺れて燈臺のひかり昇降すおもひゑがくは山東の地圖

九月二十七日 朝早く青島につく。コレラの流行甚しき爲め、上陸を禁止せ

らる。檢便しあらざりし故なりと云ふ。昨夜、事務長より買ひ求めたる遊覽パスの切符を返す。

檢便のすまぬ輩上れぬと今朝は云ふかも昨夜は聞かざりし

已むを得ず甲板上に在りて青島市街を見廻す。この市街は樹木多くして風景に富むと聞き居たれど、それらしき姿も見えず。今上陸せる青年の一隊七八十名、埠頭上屋内に整列す。上に『鐵道省より採用者集合所』と墨書せる白布垂れあり。

九時半頃より雨夕立の如く間歇的に烈しく降る。

俄雨ときどき來り上甲板にしぶきの音をたてて行くなり

十時過、領事館員二名來り『〇さんと同室なりや』と問ふ。〇〇〇氏は青島より乗船し南京へ赴く由にて要人なるべし、警護の者つき居る如し。吾等は同

室の筈なれど面倒なるを思ひ豫め隣の應接室に移り居たり。甲板に公衆電話を假設して市内との通話の便を圖れり。知人井法務官がこの地に在りと聞き居りたれば電話せんかなと思ひつつ果さず。正午出帆す。白人婦人多數この地より乗船す。船、支那海に出づれば風募りて動揺甚し。雨やまず。寢臺に在りて室備へ付の小説、隨筆などを手當り次第に讀む。

夕暮に至るも風やまず。食堂に行かず。

\*

九月二十八日 朝四時甲板に出づれば月は中天に在りて澄み渡れり。波衰へず、船の動揺やまず。九時過ぎ突然小雨あり。揚子江の濁流は一百軒も遠く支那海を濁濁せしめ居れりと聞きゐたれば海面を眺むれど、清濁の境界判然せざる内に濁流の中に入れり。河口も亦何處なるやこれまた判然せず。船は航路標に従ひて行く。

船ゆれのしづまりし頃出で見れば低き島あり長江に入る

一旦停止し檢疫をうけ、支流黃浦江を遡る。兩岸近ければ急に河の感を生ず。

吳淞の望樓に立ちうち振れる信號兵の旗のいきほひ

軍公路をまなかひに見てせまりくる敵前上陸と云ふ言葉

上流遙かに高層建築を眺めつつ進み、十六時、上海埠頭に到着す。埠頭建物の二階より旗を垂れあれば、出迎への目標なりと察知す。

岸壁の上屋に垂れし旗の文字日立製作所と著く染めたり

\*

九月二十九日 晴、昨夜は豊陽ホテルに宿泊し蚊帳の中にて寝る。寢臺は西洋式なれど室の具合、調度など何となく落ちつかぬ心地す。

岡田君、呂君を連れ來り大中農牧場の話をなす。關君に會ひ墨粉の購入方を依頼す。

ガーデンプリツヂを渡り正金ビル内の日立の出張所に至り、今後の旅行に必



要なる手續を依頼す。ガーデンブリッジは蘇州河の黄浦江に合流する點に架せられたる鐵橋にして橋の中央にバリケードを設け區分し境界に日、英の兵ありて通行人を監視す。

上海の見學は木下君來着後とし今日は地圖、案内記などを求め置く。

\*

九月三十日 晴、朝八時二十分（日本時間）出發、杭州に向ふ。榛君同道す。停車場附近に至れば今次事變に當り交戦激烈を極めしと見え、殆んど舊態を存するものなきが如し。鐵道用建物を始め民家に至るまで徹底的に破壊せられその慘狀甚し。

郊外に出づれば土地平坦にして草木繁茂し、赤裸のところ殆んど見えず、田あり、畑あり、クリークあり、村落には白壁の家など見えて車窓の風物は滿蒙の旅行と著しき差違あるを覺ゆ。

松江（上海を去る四十五料）を経て十時頃楓涇（七十一料）、嘉善（八十料）などの驛を過ぐ。この邊は『土と兵隊』の中に『私達は鐵道線の土堤に上つた、馬鹿々々しいことには我々はこの幾何學的な一直線の美しさに奇異の感を覺え、

我々はこんなになつすぐなもの初めて見たやうな氣がした』と述ぶるところにして、吾等と數年間起臥を共にせる飛松信光君も杭州灣上陸部隊に加はり、この土に塗れて轉戦せしかと思へば窓外の一水一草悉く見逃し難し。松江より嘉興（百料）に至る地域は實に沃野千里にして今や恰も實りの秋なり。『江浙實れば中國足る』と云ふ風景なり。見渡す限り黃に成熟せる稻穂の波の中に、眞白き帆の悠々たるは大運河の通ずるところなるべし。

行李さげて吾を尋ね來し童飛松丈夫となりてここに戦へり  
秋の暉は稻穂をてらしま帆てらし眞蒼に深き空にかがやく

臨平（百七十料）を過ぐる頃より山に近づく。山には雜木の外に松樹も見えて、内地に似通へる風景なり。畑には甘蔗、粟、麻、豆類、蕎麥等あり、蕎麥の花の未だ開かざるものあるは滿蒙と氣候の著しく差違あるを示す。日向葵の黄にして大なる花も少からず。

十三時杭州（百九十料）に着き一旦西湖湖畔なる新々旅館に入る。停車場附

近は今次事變により破壊せられ居る程度甚しけれども、市内一般は被害案外に少し。

この地は古き時代より開け居たるが秦、漢、唐代には錢塘、宋代には臨安、元代には杭州治、明、清代には杭州府と稱し民國に至り杭州市と改稱す。而して五代十國の時代には十國の一なる吳越王錢鏐この地に在りてその建設に努め、南宋の首都となるに及んで著しく繁榮を極め、元の時代となりても尙衰へざりし如く、マルコ・ポーロの杭州に關する記録に『豪壯華美及比類なき歡樂郷として世界の他の都市より遙に卓る』と絶讃しあるを見ても南宋當時の狀況は想像するに難からざるべし。元、明の時代には著しき變化なかりしも、明末の寇亂と清時代の長髮賊の亂とにより甚しく破壊せられ、今日に在りては宋、元時代の繁華の跡を存するもの至つて少し。

民國になりては浙江省政府の所在地として、また浙江財閥の本據として有名なり。地勢は西及南に秀峰を負ひ、吳山は城内に在り、東は錢塘江に臨み、北はクリーク、運河の錯綜せる沃野に連る。彼の有名なる大運河はこの地を起點として遠く北方に向へり。今次事變の前には人口五十萬を超えしと云ふ。

吾等は今杭州の地を歩み、遠く臨安の昔を偲び、宋朝三百年の歴史及び日宋交渉の一端を一應ここに回顧することの興味あるを覺ゆる者なり。

支那の歴史に於て唐の興りたるは我國の推古天皇の御宇にしてマホメット教の紀元元年の頃なり。爾來約三百年にして唐亡ぶ、時に醍醐天皇の延喜七年なり。宋の興りたるは村上天皇の御宇にして今より約一千年以前なり。この唐亡び宋興るまでの五十四年間を五代十國の時代と稱し革命、篡奪相つぎ群雄は割據し諸國は對峙し恰も春秋列國、戰國七雄、五胡十六國と匹敵すべき亂離を極めたる時代なり。五代とは北支那即ち中原に覇を稱へたる五朝を云ひ、十國とは中支及び南支に亂立せる十國を云ふ。太祖趙匡胤が五代の後を承けて帝位に陞り宋朝を開くや斯かる亂離の時代を醸成せるは畢竟、唐末各地の節度使が私兵を擁して割據し中央の命に服従せざるに因るとなし、私兵を禁じ兵權を中央に收め尊文卑武の政策を採用せり。従つて文化は著しく進展し學藝は盛に興隆したれども兵弱く常に北方異民族たる遼、金の脅威に惱まされ立國百六十六年にして首都汴京（今の開封）は金軍に占領せられ皇帝及び宗族の大半は北滿の地へ拉致せられ、宋の社稷は一時中絶するに至れり。會々皇弟外に在り

てその難を免れたるにより即位し南渡して都を臨安（今の杭州）に奠め金の壓迫より逃れんとせり。この南渡以後を南宋と稱し、以前を北宋と稱す。南宋となりても金の壓迫は毫も屏息することなく金帝、亮が畫家をして杭州吳山及び西湖を描寫せしめ自ら筆を執つて『萬里車書合混同。江南豈有別提封。移兵百萬西湖上。立馬吳山第一峰』と題したる如きその一端を窺ふに足るべし。かかる脅威の下に在りながらも元に亡ぼさるるまで、よく三百年の久しきを保ち得たるは太祖が五代の僭偽に鑑み特に節義廉耻を尙び賞罰を明にせることの影響少からずと云ふ。

日支國交は遣唐使の停止以來杜絶の状態となれり。會々北宋の神宗の國書が白河天皇の御宇、徽宗の國書が後鳥羽天皇の御宇に齎されしことあるも不遜の言辭、書中に在りたる爲め親交を促進するの機運に到達せず、兩國家間の公式國交は恢復するに至らざりしなり。然れども僧侶、商人等の私的交通は五代、宋に至りて漸く頻繁となり彼我文化の交流は著しくなりたるが如し。

平清盛は日宋貿易を大に奨勵したる一人なり、兵庫港、音戸瀬戸を修築し船運の便を計りたるも日宋貿易の爲めなり。源實朝も亦、日宋交通の熱心者にし

て自らも入宋を欲し大船を造らしめし程なり。僧侶の入宋して宋帝に謁見せる最初の者は東大寺の裔然なるべし。北宋の第二世太宗に謁したる際の記事宋史外國傳に在りと云ふ。即ち

（太宗）雍熙元年（皇紀一六四四年）日本國僧裔然。與其徒五六人。浮海而至。獻銅器十餘事。……裔然善隸書。而不通華言。問其風土。但書以對云。……太宗告見裔然。存撫之甚厚。賜紫衣。館于太平興寺。上聞其國王一姓傳繼。臣下皆世官。因歎息。謂宰相曰。此島夷耳。乃世運遐久。其臣亦繼襲不絕。此蓋古之道也。中國自唐季之亂。寓縣分裂。梁周五代。享歷尤促。大臣世胄。鮮能嗣續。云々

五代亂離の後を承けたる太宗が萬世一系なる天皇を戴く日本の國柄を聞き感ぜるは蓋し當然なりと云ふべし。この明君太宗は地方官を深省せしむる爲めに州縣の官廳に石を立て銘文を刻せしめたりと云ふ。その銘文の要點は爾の俸爾の祿。民の膏なり民の脂なり。下民は虐げ易し。上天は欺き難し。

なり。この戒石銘文は夙に我國にも傳はり江戸時代の爲政者中にも共鳴せる者

この戒文を用ゐたり。明治時代になり平田内務大臣はその奉職中、省内の茶碗に右の銘文を記せるものを用ゐたりと聞く。

前にも述べたる如く僧侶の入宋するもの多く長唄石橋の主人公寂照法師も榮西、道元の如き禪僧もあり。また來朝歸化せる宋僧も少からず、例へば建長寺道隆、圓覺寺祖元の如きそれなり。祖元は南宋の滅亡を目撃し彼自身元兵の暴虐に直面したる後渡來せるものなれば、元寇の役に際し執權時宗を激勵せしは蓋し故ありと云ふべし。

宋代ほど漢人の民族意識の發達したる時代は少しと云ふ。畢竟、北方異民族の間斷なき壓迫に反抗して起りたるものなるべし。また史論に於て正閏論、正統論、名分論など盛に行はれたり。司馬光の資治通鑑、朱子の通鑑綱目、歐陽修及び蘇東坡の文となりて我國にも傳來し後年北畠親房の神皇正統記、頼山陽の史論などに影響ありたりと云ふ。

杭州を訪ふ者にして西湖の明媚なる風光に接せざるものはなかるべし。西湖は杭州の西端に接し周圍は約十四軒あり。北、西、南の三方は秀麗なる山々に

より圍まる。山は高からず、最高三百米内外なり。湖中最大なる島を孤山と云ふ。西北隅に在りて白堤及び西冷橋を経て湖岸に連る。孤山の外に小瀛洲、湖心亭、阮公墩等の小さき島々在りて湖上に浮ぶ。湖の西岸に近く六橋烟柳の蘇堤帯の如く横はりて外湖と裏湖とに分つ。此等の堤や橋や島を初め湖畔に散在する各種建造物が四圍の山貌と湖水とに反映調和し茲に人工造園的一大景觀をなす。元來この湖は灌漑用貯水池として設けられたるものを幾百年の長き歲月の間に數多の王侯、武將、學者、詩人、高僧、名妓等が關與して漸次大成せるものなり。前述の白堤は唐の白樂天、蘇堤は北宋の蘇東坡の築造せるによりその名有りと云ふ。然し西湖を天下の名勝地として世に紹介したるは南宋奠都後のことなり。南宋人は上は天子より下庶民に至るまで甚しくこの西湖遊樂を好みたるが如し。宋末の宰相賈似道の如き蒙古軍來襲の報至るも尙西湖行遊に耽り居たりと云ふ。従つて『西子は呉を亡し、西湖は宋を亡す』の語を生ぜり。西子は美人西施にして呉王夫差がその愛に溺れ滅亡せるを指す。西子と西湖とを對照せるものに『水光激灑晴偏好。山色空濛雨亦奇。若把西湖比西子。淡粧濃抹總相宜』と云ふ蘇東坡の詩あり。後年芭蕉が奥の細道の道すがら酒田の湊よ

り東北の方山をこえ、磯を傳ひいさごをふみて十里の雨中を象潟に至り『象潟  
や雨に西施がねぶの花』と口ずさみたるは蓋しこの東坡の詩を思ひ浮べしなる  
べし。

吾等が宿泊する新々旅館は道路を隔てて西湖にのぞめり。階上に立ちて眺む  
れば眼前の孤山は後湖に映じ、左方に白堤、右に博覽會木橋の彼方に蘇堤虹の  
如く帯の如く見ゆ。また西湖をめぐる山々は高からざれども秋天に聳え立てり。

勇敢に飛松伍長がたたかへる山はいづくと山やまを見る

南畫は主觀寫眞は客觀などおもひつつ西湖見て居り

小憩の後、自動車を驅りて白堤、斷橋、平湖秋月、中山公園、岳王廟、蘇堤、  
淨慈寺、防空避難所等を巡覽すれば馥郁たる香氣、疾走する車中に入り來る。  
至るところに木犀の花盛りなり。

路傍邸宅に並びて朱子廟あり。朱子は宋學を大成せる人にして我國人にも普

く名を知られたる學者なり。吾等は小學生時代に少年易老の詩や精神一到何事  
不成の訓誡によりてその名を知り、中學に入り論語の朱熹集註を學びたること  
あれば今門前を過るに當り、車を停めて參詣す。規模極めて小なり、恐らく朱  
子廟としては主要なるものにあらざるべし。近時修理せしものの如く、塗粧鮮な  
り。位牌壇の傍に寢臺を置きて住む人あり。相貌普通のルンペンとも思はれず。

朱子廟に寢床ならべてすむ人はすぎし戦に家焼かれしか

孤山の西方棲霞嶺の南麓、西湖に面して岳王廟あり。南宋の忠臣岳飛を祀る  
ところにして規模の宏壯なること湖畔の諸堂祠中屈指のものなり。湖畔より廟  
に向へば廣き道路の兩側に菜館、車棧等の並べる様は内地の田舎に於ける門前  
町に彷彿たり。道路の中央に『碧血丹心』の牌樓あり。これを潜りて進めば大  
なる樓門に達す。門の兩側に白壁連れり。門を入れば正殿あり岳飛の像を祀る。  
廟境内は廣く樹木多し。木犀の花盛りにて芳香到るところに漂へり。正殿に西  
隣して後殿あり、岳飛の兩親並に子息の像を祀る。尙、正殿及び後殿に附屬す

る諸祠ありて五夫人並に諸侯を祀る。後殿の南にして廟境内の西南隅に一區劃をなす墓地あり。墓地參道の正面に岳王墳あり。これに並び長子雲の墳あり。老樹繁茂し、その枝葉は兩墳の上を覆ふ。墳は饅頭型にして三和土の如きものを以て塗れり。參道の左右には文武官の石人並立す。墓地門外の中庭に忠池、忠泉と稱する池、井あり。中庭の南北兩側の壁に古今有名人の碑石あり。『盡忠報國』と雄渾なる大文字もあり。

岳飛は南宋初頭の人、貧しき農民出身なれども膂力人に過ぎ、寡黙にして氣節あり、且つ好んで書を讀みたりと云ふ。二十歳、宋の義勇軍に投じ累進して樞密副使となる。彼の軍隊には紀律あり、秋毫も民のものを犯すことなく、彼自身も亦潔白なりしは他にその比を見ざりしと云ふ。當時北方金の壓迫に對して和戰兩様の議あり、岳飛は主戰論の頭領たりしかば和平論者宰相秦檜の陥るところとなり投獄せられ、三十九歳を一期として遂に毒殺せられたり。岳飛の歿後、宋と金との和議は金によりて幾度か破られ、また結ばれたれども金の壓迫は終始一貫し當時に多少の消長を見たるのみなり。和議破るるに及べば岳飛の忠節を回顧するは人の情なり。斯くて岳飛の官を復し、禮を厚くして改葬し

たるが今日の岳王廟なり。岳飛投獄せらるるや何鑄これを取調べたるに、岳飛の背に『盡忠報國』の四字が黒々と入墨しあるを見て大に感じたりと云ふ。幕末の勤王の志士橋本左内の號『景岳』は岳飛を景慕するの意なりしと傳ふ。岳飛は書を善くし我國人にも尊重せらる。彼の書ける前後出師表は有名なりと聞けば吾等も樓門賣店にて石摺を買へり。

木犀の花咲きかをる庭にして『盡忠報國』の文字に涙す

淨慈寺は西湖の南岸に在りて宋代禪宗五山の第一なりしと云ふ。境内廣し、本堂の裏山に防空避難所設けあり、岩を穿ち中央通路の兩側にアパートの如く室並べり、電燈、水道、水洗便所等の設備行届けり。

夕食後旅館前に出で湖邊のベンチに倚り月の出づるを待つ。今宵は陰曆十七夜なり。行き交ふ人稀なり。頭上の柳を動かすほどの風はなけれど暑からず。

今もなほ敵の出づるときく山の影はうつろふ黄昏のりみ

現し身の耳にきこゆる音はたえ木犀の香は湖にただよふ  
月待つと湖に向へばゆくりなくあと幾度の秋をおもへり  
六十年うはの空にて見し月を今宵いとどしく待たるは何故  
人の世は思ひもかけぬこと多し千里の外に月待つもそれ  
しつけさのきはまる如き湖面を照してのぼる十七夜の月  
蘇東坡も白樂天もめでにけむ湖を照しつつ月すみわたる

\*

十月一日 晴、朝飯の際一階食堂より裏を見るに崖上の塀に鐵條網を張れり。  
最近まで夜中時々敗殘兵の襲來ありたりと云ふ。

今朝高潮を見物に行く一群あり、昨日も多數ありしと云ふ。錢塘江の高潮は  
世界的驚異なる自然現象の一なり。杭州灣と錢塘江とが漏斗狀を形成せる關係  
にて差し潮の際は海水が河水に逆行して遡り暴漲し河海兩水の相接するところ  
二米乃至六米に及ぶ波頭を生じ毎時二十籽位の速度にて進むと云ふ。毎秋陰曆  
八月朔望に最も壯觀を呈すと云へば今が見頃なるべし。この現象は夙に我邦に  
も傳へられ南畫に錢塘觀潮の圖あり。吾等は時間の都合にて觀潮の機を逸す。

旅館前にて小さき遊覽船に乗る。日覆もなき貧弱なるものなり。五十歳位の  
正直相なる船頭舳先に在り、その女房艙に在りて櫂にて漕ぐ、頗る漫々的なり。  
白堤の斷橋を潜れば外湖に出づ。陸上より眺むれば左程にも思はれざるこの湖  
も舟より見渡せばなかなか廣き心地す。鏡の如き湖面に悠々と漕げる遊覽船二  
三浮べり。

暫くにして湖心亭に達す。湖上まで生ひ繁りたる楊柳の老樹の間より赤き堂  
宇見ゆ。上り見るに小さき島なり。昔は湖心寺及び塔ありたる由なれど今は見  
えず。剪燈新話の牡丹燈記とは關係なけれど湖心寺の名を聞きて連想す。

船は更に南方なる小瀛洲の北岸につく。上り見るに島は湖心亭より大なれど  
も島の内部は一面の水にして大なる蓮池をなしその周圍に狭き陸地帯の如く取  
り巻き老樹鬱蒼と繁茂せり。池の中央に小さき陸あり。これを南北に結ぶに石  
橋を曲折して架せり。橋の中程に幾つかの亭あり。中にも珍しきは卍字形をな  
せるものなるべし。南岸に清の聖祖の大書せる三潭印月の御碑亭あり。池中小  
舟を浮べて蓴菜を採取するものあり。

再び船に乗り蘇堤に沿ふて北上し旅館前に歸る。上陸し木橋を渡り孤山を徒

歩にて一周す。楠、梅檀、杉、青桐、鈴懸等の樹木茂り林相内地と異なることなし。木犀の香殊に甚し。

孤山に林和靖の墓あり参詣す。和靖は宋の詩人にして梅と鶴とを愛せりと云ふ。附近に梅樹多し。亭あり聯に曰く『鶴去亭猶在。梅開山不孤』。この和靖に因める我國に於ける傳説あり。彼の末裔に林淨因と云ふ者ありて建仁寺龍山禪師の元より歸朝するに當り伴はれ來り奈良に住し饅頭を作る。これを奈良饅頭と稱し我國に於ける饅頭の元祖なりと云ふ。淨因後に姓を鹽瀬と改めたり。また淨因の末裔に林宗二と云ふ者ありて節用集を初めて開板す。節用集の古本を饅頭屋本と稱するはこれが爲めなりと云ふ。云ふまでもなく節用集は足利時代より明治初期まで行はれたる大衆的小百科字典なり。

十三時二十分杭州驛をたち上海に向ふ。車窓より見れば暗く濁れるクリークの水を特殊の水揚げ装置を用ゐて田に溉げるもの多數あり。案内書に龍骨車とも牛骨車とも誌せるはこれなるべし。その構造を見るに細長き木樋を適當なる傾斜に据ゑ付け。樋一杯の木板を水中より高き方へ動かして下の水を上方へ押し上ぐる仕掛なり。移動する板は多數にして一定の間隔を保つ様綱を以て綴る。



車骨龍の近附江浙



綱は環狀に結びあり、これをベルトの如く軸にて廻す。軸を廻すに人の足にて踏むものあり、水牛を使役するものあり、人の足にて踏むには軸を長くし軸の周圍に踏み段を設くること内地の水車の如し。三人並んで踏めるものあり。また水牛を使役するにはベルホキールを介して、地面を歩みて廻す様にせり。

天野信景の鹽尻に『龍骨車といふは長き樋のやうなるものに四方なる板を多くまとひつなぎ池水をも、くり上ぐる也』とあるは上述のものと略同様なるが如し。我國にては千百年の昔 淳和天皇の御宇の大政官符に『耕稼之利。水田爲最。開大唐堰渠。皆構龍骨。多收其利。宣做造以資農作。貧無力者。國司資給之。』とあるを見れば當時龍骨車を獎勵し灌漑の便を圖りたるものの如し。

水揚げの車ふみつつ人ならば日ねもす何を語りつづくる  
龍骨車の軸のめぐりを日もすがら頸垂れ歩む水牛あはれ

畑の中に彩色せる木棺の据ゑあるを見る。古びたる棺の見えざるは一定時間を過ぐれば何れへか移すものの如し。『葬』の字は艸と艸との間に死を配して作

り往昔死骸を草原に捨てたる風習に因れりと云ふ。この風習も昔のそれと關聯あるが如く思はる。

十八時上海につきカセイホテルに入る。木下君既に來りて待てり。カセイ即ち Cathay とは『契丹』と云ふ言葉の轉訛にして今日に於ても支那を指す場合に China の外にこの言葉を用ゆ。

十月二日、晴、上海滞在。

十月三日、晴、八時上海をたち南京に向ふ。沿線は昔の吳の國、今の江蘇省に屬する長江下流の平野にして見渡す限り普く耕作しあり。

九時半蘇州（上海を去る八十八軒）に到着、一旦下車し午後の急行までの七時間にて見學をなす。驛前にて馬車をやとひ寒山寺、西園、留園、虎邱、大丸百貨店、玄妙觀、獅子林、報恩寺などを巡り、驛に歸れば列車は取り消しとなれり。繁の家旅館に一泊す。

蘇州は春秋時代（皇紀元年前後）の末期に吳王夫差と越王勾踐とが輸贏を決したる地なり。初め吳王闔閭は伍子胥、孫武の如き名臣を得て國を富まし武を練り勢力漸く蓄ひたれば隣國を平定し遂に覇者たらんと志し南方の國、越を伐ちて敗れ傷死せり。その子吳王夫差は所謂臥薪嘗膽三年の後越王勾踐を降し會稽山に父の耻を雪ぎ得たれども戰勝の結果は氣驕り日夜歡樂を事とするに及び越の滅ぼすところとなれり。『臥薪嘗膽』や『會稽の耻を雪ぐ』や『吳越同舟』など吾々に親しき言葉は今も猶ほ當時の名残をとどむるものなり。

蘇州の地は古來吳、吳都、姑蘇、平江などと稱し名勝、舊蹟地として名あり例へば『上に天堂あり下に蘇杭あり』と云はれ、その明媚なる風光は杭州と併び稱せらるるところなり。その位置は太湖の東岸に近く大運河と蘇州河との會合點に在りて巨大なる城壁を以て圍まる。現存の城壁は清の時代に改築せるものにて高さ二十八尺、幅十八尺ありと云ふ。城内は街路と水路と相交錯し、水路を跨ぐところ石の太鼓橋にして姑蘇三千六百橋の名ある特殊風景をなせり。

古來蜀錦吳綾の稱あり。古の吳國、今日の蘇州も亦生絲、絹織物をその主要

産物となす。日本書紀 應神天皇の卷に『卅七年春二月戊午朔、阿知使主、都加使主を吳に遣して縫工女を求めしむ。(中略) 吳王是に於て工女兒媛、弟媛、吳織、穴織、四の婦女を與へぬ。』とあれば我國とこの地との因縁必ずしも淺からざるなり。因に『吳』を『くれ』と讀むは吳國が我國より西に當るを以て日の暮るる方なる意より生じたりと聞く。

寒山寺は驛西南方六料の地點なる平地に在りて規模小なり。堂宇は新しく境内は樹木少く庭園らしき趣を見ることが難く雜草を踏み分け鐘樓に至る状態なり。梵鐘は山田寒山の斡旋により伊藤春畝公を後援とし名古屋にて鑄造せるものなり。文衡山筆の楓橋夜泊の詩碑は破壊せしものを繼ぎ合せて壁に嵌め込み保存しあれど損傷甚しく讀むことを得ず。別に清の俞曲園の筆になる新しき詩碑建たり。

寒山寺を出で運河に沿ひて東へ進み運河を渡りて西園に至る。園は戒幢律寺の境内に在り。感心すべき程のものとも思はれず。寺は清末の建立にかかり規

模小ならず。塑像の五百羅漢あり金色に塗れり。

西園より東に行けば留園(驛西南方三料)あり。純支那式の名園なり。明の時代の東園の故蹟にして大なる樹木を以て圍まれ、内部は小庭園に分たれ巧に廻廊を以て連絡す。中庭は平庭にして一ヶ所に太湖石を立てて岩組をなしこれに配するに草木を以てす恰も南畫を見るが如し。後庭は池を中心とし石木の配置に粹を盡せるものなり。園門に於て木下君に聲をかくるものあり、もと代々木營業所に勤務せし小林岩夫君なり、今次事變に當り志願して軍屬となりてこの地に在りと云ふ。

留園より北方なる虎邱山(驛西方四料)に向ふ。道は平坦なり。路傍に稍大なる墳墓の荒廢せるを見る。墓碑徒に傾きて、盜掘せられしもの如し。山の麓に程近きところにて馬車を下れば多數の乞兒群をなして來り、まつはり喚く、『先生銅板進上』と叫ぶ由なり。また山を一巡する間、花を買へとつき來る。花は小さき白き蘭の如きものにして香氣馥郁たり。これを麥蘂にて編める小さき枕の形、又は扇の形せるものの中に入れあり。山は低き丘陵にして吳王闔閭の墓

あり。越王勾踐が一敗地に塗れ、その臣范蠡と共にこゝの墓守となり、或は美姫西施を献じ吳王夫差の歡心を求め、忍従したる故地なりと傳ふ。山中に數々泉、試劍石、劍池などの古蹟少からず。顔眞卿の筆になる『虎丘劍池』の大文字を刻める石あり。

花買へと纏る兒らは煩けれど手にせる蘭の花はかぐはし

城内大丸百貨店に至り晝食をなす。こゝは京都大丸の經營に係るものなり。土産物を二、三買ふ。店員には支那人多し。

玄妙觀（驛東南方二軒半）は城内の中央に在る道教の本山なり。境内に賣店多く、參詣者の雜聞すること甚し。（道教にては〇〇寺と云はず〇〇觀と云ふ）。

獅子林（驛の東南方二軒弱）は城内の東北隅に近き地に在る有名なる庭園なり。元の南畫四大家の一人なる倪雲林の作なりと傳ふ。北京の萬壽山に於て、杭州の西湖に於て大規模なる支那式庭園に接し、今日留園、獅子林に於て小規模なる名園を見る。先刻留園に至り稍驚異を感じたるが、今こゝに來り聊か親

しみの生ずるを覺ゆ。中にも初め異様に感じたる太湖石の石組の趣など、空想的にして興味あるものの如し。

現し世の姿にとほきこの庭も對ひてあれば親しさのわく  
獅子林のしづけき庭にたつ石の丈高くして骨ばかりなる  
幾由旬空にそびえてたつ石を現ともなくいまは見て居り  
神仙の住家とも見む太湖石のいただき近く洞のあけるを  
この石ゆひそかに風のおこるかと佇みて見つくしき姿を

\*

十月四日 晴、九時三十二分蘇州をたち南京に向ふ。昨日も今日も二等車に支那人客多し。車中手荷物物の検査あり。無錫、常州に至る沿線は眞平なる一面の稻田なり。吾等に近き座席に二人連れの邦人女客あり。その一人は三十幾年を上海に過ごせりとして思ひ出話を頻りになせり。

三十年をここに暮しつと語りをる女老いたり稻田は續く

手荷物を棚よりおろし検査待つその時の間のしづけき響ひびき

鎮江に近づくに従ひ低き丘あり、山あり、小高き處に立ちて鐵道を監視する皇軍の兵士あり。その御蔭にて吾等は無事旅行し得ることを思ひ車中より感謝しつつ過ぐ。

鎮江は揚子江の南岸に位する都市にして古來軍事的、經濟的の要地たり。杭州を起點とせる江南大運河はこの地にて終る。鐵道はここより揚子江の南岸に沿ひ、田の中を西に向ひて走る。線路の南に近く山ありてつづく。鎮江の驛を過ぐれば車窓の右側、蘆荻の彼方なる江岸の低き山上に塔見ゆ、寒山寺なりと云ふ。更に進むに鷺鳥を多く飼へる農家あり。またところどころに白鷺の立てる田もあり。

揚子江は土堤の彼方に隠かくひて白鷺の立つ田は刈られあり

紫金山、玄武湖を左に見、やがて城壁に沿ひて走り十三時三十分南京（上海



蘇州獅子林 奇石怪巖

を去る三百十一粒)につく。驛は市の東北部城外の江岸に在り。ホームに於て  
一列となり豫防注射の證明書の検査をりく。吾等の分は有効期限二ヶ月を經過  
しむればその場にてコレラの注射を一本施さる。

注射する軍醫の技はたくみなり針太けれど痛からなくに

改札口に至れば女子巡查ありて活動せり。

紺の制服つけし女の巡查るて女の旅客をいちいちしらぶ

城門にて査證あり。一旦中央飯店に入り自動車を驅りて北極閣、鷄鳴寺、孝  
陵、中山陵、光華門戰跡、中華門戰跡、孔子廟址などを見學す。

喧噪なる上海より來りて見ればこの南京は著しく落着きたる都なり。南京が  
初めて首都となりたるは吳の孫權の時代(我 神功皇后攝政時代)にしてその  
後、南北朝時代に南朝の都となりたり。支那を統一せる國家の首都となりたる

は明の太祖の時代（我 後村上天皇時代）なるべし。明も五十餘年にして都を北京に遷せり。今の南京の街路はその方向が東西と南北とに整然と貫通し居らず、雜然たり。従つて都城の外圍たる城壁の配置も、矩形をなさず、不整形なり。強いて形を云はば西北の江岸より東南の紫金山に向ひ一樣の幅にて稍弧形を爲し尙中心點より正南に向ひて略同様の幅にて突出し恰も『イ』の字を裏より見るが如し。城壁は高さ四十尺を超え幅は二十尺を下らず、周圍は九邦里に及ぶと云ふ。尙城壁の外圍に廣き水濠を圍らし實に堂々たるものなり。現存のものは明の時代に築造せりと云ふ。城内は明の遷都後に於ても相當繁榮を保持し居たりしが清初及び長髮賊の兵燹に罹り著しく荒廢に歸せり。清末開港場となるに及んで外國人の來往頓に劇増し稍恢復せるも第一第二兩度の革命に際しまたまた荒廢するに至れり。蔣介石が國民政府を樹立しこの地を本據となし銳意都市建設に力を注ぎたる結果は今日見る如き近代的面目を具備するに至れりと雖も未だ完成の域に達せずして今次事變に際會せり。

市の東北、城壁に接して外に玄武湖あり。湖に近き城壁内の丘陵に三層の北極閣立てり。古の天文臺なりと云ふ。閣上に登り見るに玄武湖は眼下に展開し

數箇の島浮べり。島々は長き土堤を以て連ねあり。眼を轉ずれば遙に中山陵は紫金山の青きが中に白く光り、近くは城内の大厦高樓、指呼の間に在り。尙城内に飛行場見え、その他にも相當空地の存するを見る。閣より下り、程近き鷄鳴寺に詣る。六朝累代居城の址なりと云ふ。

中山門は市の東面城壁に在り、昔は朝陽門と稱せしと云ふ。門内に明の故宮址あり。明の太祖が心をこめて造りし紫禁城も長髮賊の兵火に燒壞せられ今は見る影もなく一面の草原と化し居れり。中山門と南京驛に近き江岸とを連絡し市内を貫通する大道路を中山路と稱す。道幅廣く曲折少く、よく鋪裝しありて支那第一の公路なりと云ふ。

中山門より城外に出で北折し約四料にして孝陵に達す。明の太祖洪武帝と馬皇后とを合葬せる山陵にして玄武湖の東、紫金山の麓なる小丘を開きて築きその土饅頭は綠樹を以て覆へり。規模の宏大なることは大明國の盛時を回顧するに足るべしと雖も樓宇は悉く壞滅に歸し古びたる樓臺獨り高く存す。樓臺二基前後に重りて立ちその通路は隧道の如く貫きて見ゆ。長き參道の兩側には花崗石にて作れる多數の石人、石獸等五百年の風雨を凌ぎて並び立つ。陵域の樹木

は數百年の樹齡を保つもの少きが如し。

兩側の石獸せきじゆうのせなを吹きわたる秋風さむく參道はとほ

五百年火に焼くるものは皆焼けて樓臺のみぞ高く残れる

したたかに荒れて古びし樓臺を仰ぎつつ想ふありし樓宇を

孝陵の東に隣接して中山陵あり。革命の元勳、中山先生孫文を葬るところなり。規模宏大にして周圍を中山公園となしドライヴウェイを設け現代的なり。陵は紫金山の麓、稍高きところを切り開き圓頂ドームを造り、中に靈柩を安置す。ドームの前方に接して宮殿の如き支那式大樓門西に向ひて聳ゆ。樓門前面なる廣場は平坦にして、幅は輿行よりも遙に廣く前方に擁壁を築きて土留となす。樓門正面に門よりも幅廣き參道階段あり。階段は左、中、右の三つに區劃せられ勾配頗る緩なり。階段の兩側なる擁壁の前方はこれまた緩なる斜地を作り等間隔に綠樹を植ゑ、更にその前方平地には芝を植ゑ付け、後方山地をも取り入れて全體を一大綠地と化成せり。その中に高き樓臺、長き擁壁、廣き階段

等の白色燦然たる建造物を配置せる景觀は恐らく蔣氏の企圖せる國民政府の威容を天下に誇示すべき二十世紀的陵墓の模範たるにちかかるといふべし。我軍の南京攻撃に當りては特に留意してこの陵の破壊を避けなければ損傷なし。尙今は皇軍によりて保護せられあり。

中山路より白き牌樓はいろうを見上ぐれば博愛の二字たかく輝く

牌樓をくぐりて立てばますますなる道清みよ々し山までつづき

紫金山しきんざんのあをき麓にどつしりと構へて見ゆる門の上の門

御影石の白き階段はなだらなり植込みの中を三百三十三段

現し世に君るますときここに立ちかく國原を見放なけしやいな

光華門は東寄り南面に在る城門にして門扉は内外二ヶ所に設けあり。左右の城壁は厚くして高し。水濠また廣くして一條の道路城門に達す。昭和十三年十月二月脇坂部隊の一番乗りをなせるところなり。先鋒伊藤部隊長光華門に突入し右前額部と右足とに敵彈を受くるも屈せず、前上海事變に於て拜領せる恩賜の



義眼をはづし佩用の軍刀と共に林上等兵に托し、なほも奮戦中再び前額部に敵弾を受け遂に絶命せりと云ふ。彈痕新たなる門扉を廻りて當時の戦況を聞く。城壁上に伊藤部隊長の墓標を設け、美しき花供へありたり。

城壁に残る爆破の痕見つつなしとげたりし瞬間を想ひぬ  
大小の彈丸の飛び交ふ中にしてこの城壁を登れりと云ふ  
一番乗りは脇坂部隊と云ふ聲のラヂオは今し蘇りきつ  
丈夫やおのれ傷つき畏しと恩賜の義眼をはづしたたかふ  
今もなほこの城門をまもるがに南にむきて標木はたつ  
東京の町内の人をあないする兵にあひたり城壁のりへ

敵の殘せる鐵兜あり

光華門門のわきなるくさむらに血にくろずみし鐵兜見つ

中華門に於ける南京攻撃戦は光華門に於けるそれと劣らざる程度の劇烈さを示せりと云ふ。中華門は南面城壁に在り、恐らく南京の南門なるべし。この門

より眞北に向ひて子午線路あり、中山門より眞西に走れる中山路と交叉合併し中山路の北上部分の一部をなせり。門外なる梅岡の上に雨花臺あり。昔、梁の武帝の時、雲光法師この丘上に坐して説法せるに天大に感動し寶花を雨の如く降らせたりと云ふ傳説の地なり。丘の一部を切り開きて自動車道路貫通せり。道路の兩側に小き寺院並べり。登り見るに低き丘なれども四方展開し眺望佳なり。丘上に墳墓の散在するあり。云はるるがままに墳墓の一を覗き込めばトーチカにして路傍の寺院とも地下道にて連絡せり。南京内外には斯かる偽裝せるトーチカ多數ありたりと聞く。

只管に歐米の力に依存して築きしトーチカ護りかねつも

孔子廟址は秦淮河に架せる文德橋の西岸にあり。孔子その他の聖賢を祀れる廟なりしが、今次事變に當り焼失せり。境内門前に掛小屋賣店多數ありて雜問を極む。廟に近く、有名なる秦淮あり、妓樓軒を並べ畫舫運河に滿てり。

秦淮の畫の畫舫の秋寂びてよどめる水にありなしのかぜ

宿に歸りたるに氣遣ひたる程に注射の反應もなく安かに眠る。

風呂に入るときに見たれど吾が腕はれたるばかり熱遂に出でず

\*

十月五日、晴、南京に來り吾等の想ひ起すこと二あり。一は南京條約他は白河鯉洋のことなり。南京條約は三箇年に亘る阿片戰爭の結果清國と英國との間に成立せる講和條約にして香港の割讓、二百萬兩の賠償金の支拂、上海外四箇所の開港等を決定し西曆千八百四十二年八月二十九日揚子江上の英艦コーンウォールズ號に於て調印せられたるものなり。これ實に歐洲諸國が支那にその根據地を獲得せる第一歩なり。爾來一百年の間に英國は香港を據點として中支に南支にその勢力を扶植し以て今日の狀態を醸成するに至れり。この條約の調印せられしは我天保十三年にして我國に在りても露、英、米の勢力が東西北の三方より頻りに來迫せるときなり。天保九年水戸烈公が鎖國的建白書を幕府に

提出するに至りたるもこれが爲めなり。

南京條約といふがなりしその日より支那は日に日に蠱食まれけり

白河鯉洋は吾等の姻戚にして明治の末葉張之洞總督の招聘に應じ、來りて師範學堂に教鞭を執りたることあり。三十數年前のことなれば當時の建物など今猶殘存するや否や頗る疑問に屬すれども尋ね見たき心切なり。然れども時間の都合にて果さずして去る。

君よりは二十年長く生きのびて今日を來て見つ南京の街  
杯を手にする君のおもかげをしのびつつ見しふるき都を

八時南京をたち上海へ向ふ。車中、田華中鐵道副總裁に面會し種々貴重なる談話を聞く。

江蘇の沃野は見れども飽かず。

黄に光る田を縦横に區切りつつクリークの水の行衛遙けし  
クリークに水は淀みて黄に匂ふ田の水平を吾に知らしむ  
晴れとほる空のはてまで實る田の米はいく百萬石ならむ

十三時半上海につく。小櫻丸船長に面會し漢口に於ける岩橋君その他諸君の  
消息を聞く。

十月六日、晴、上海滞在。

十月七日、晴、上海滞在。

長江五千料日夜悠々として流れ大洋に注ぐところに廣袤果しなき三角洲を生  
じ大沃野を形成せり。その河口に近き一角に支那大陸の門戸として國際都市上  
海はあるなり。上海の中心は略北緯三十一度なれば恰も鹿兒島縣下の種子島、

屋久島あたりと同緯度なり。揚子江の河口より約百料にして支流黄浦江口に達  
し、更にこの支流を遡ること二十料にして上海埠頭に達す。

上海の古名を滬城と云へり。従つて支那事變以前は上海、南京間を京滬鐵路  
と稱へたり。滬は『竹を海邊にならべ立てて魚を捕へるもの』なれば上海は漁  
港より發達したるところなりと云ふ説あり。宋の末期には内陸運輸の要衝とし  
て漸次發達し、やがて外洋船の往來頻繁となるに及んで市舶提舉司及び榷貨場  
の如き貿易機關の設置を見、下つて元代には關稅徵收その他外國貿易を管掌す  
る市舶司を置き以て今日の大貿易港たるの素地を具備するに至れりと云ふ。西  
曆千八百四十二年の南京條約締結により『この地は廣東、廈門、福州、寧波と  
共に外國貿易の爲めに開放すること、外國商人は商業に従事し得る爲め迫害又  
は拘束を蒙ることなく居住し得ること』を協定せり。續いて英、佛、米三國の  
租界と稱する外國人居留地にして實質上支那主權の及ばざる區域が上海の一部  
に發生するに至れり。後に英及び米の兩租界は一の共同租界となり佛租界のみ  
今日に至るまで專管租界として存續す。

かくの如くにして大上海約九百平方料の地域は三箇の獨立せる官憲により支

配することとなれり。即ち工部局の支配する共同租界、フランス領事の支配する佛租界、上海市政府の支配する華街これなり。各區劃の面積及び人口は次の如し。(面積は日支事變以前のものとす)

	面積(平方料)	人口(昭和九年六月 上海公安局調)	人口密度(料平方 料當)
共同租界(含越界 築路)	約 二〇	一、〇〇七、八六八	五〇、〇〇〇
佛租界	約 八	四九六、五三六	六二、〇〇〇
華街	約 八七二	一、九一三、五八六	二、二〇〇
計	約 九〇〇	三、四一七、九九〇	三、八〇〇

この人口密度を一見するときは何人も上海の繁榮が租界内に偏在し居ることを直に知得するならん。元よりかかる状態を支那自身喜ぶべき筈なけれども實力の乏しき者に在りては如何ともすべからざる状態なり。即ち支那國民が實際問題として外國勢力下の租界内に居住することを安全なりと思惟し希望するに至りたる結果なればまた已むを得ざるものと云ふの外なかるべし。然れども曩の歐洲大戰後遽に租界回收熱が識者の間に勃興し民國十六年(昭和二年)には

上海特別市制、十九年には市組織法を實施し市街の北部に廣大なる地域を選定區劃し新市街の計畫を進め租界の繁榮を奪ひこの地に移植せんと企て、その中心地に市政府、圖書館、博物館、病院、大運動場等の建設竣工したる程度にて今次事變に遭遇せり。

共同租界は蘇州河を跨ぎ南北岸に在りて東は黃浦江に達せり。共同租界の南に在りて黃浦江に茫む地域は舊城内及び南市と稱し華街に屬す。佛租界は共同租界の南部にして舊城内の西に在り。共同租界の内蘇州河の北岸に沿へる地域を虹口カウキと稱し、もと米租界なりしが、今日は日本租界の如き觀を呈す。虹口の東にして黃浦江に沿ふ一帯を揚樹浦ヤウジュと稱す。

蘇州河の北部にして虹口の西及び北に在る廣き部分を閘北ザンペイと稱し華街中の商業交通の重要地域なり。吳淞、南京、杭州に至る鐵道の起點たる上海北停車場を始め商務印書館、中國公立醫院、製紙會社その他の工場多數並べり。我が海軍陸戰隊本部、練兵場はこの地に接近して設けあり。

市政府建物のある新市街中心地は閘北の東北及び揚樹浦の北に當りて設けられ、未だ在來の市街と人家連擔し居らず。大場鎮は閘北の西北部に當り、廟行

鎮は北部に當りて點在す。

今次事變の交戦は租界の周圍に於て行はれしが、中にも閘北は上海事變の際も、また今次事變の際も交戦激烈を極めし爲め今は無残なる廢墟と化し居るところ少からず。

家といふ家みな焼かれ毀たれし壁並び居り秋陽照りつつ

大場鎮は、その占領により上海戦の雌雄を決したる如き頗る重要な地點なり。今は低き丘の上に高き表忠塔聳え立てり。この邊一帶は土地平坦なれどもクリーク縦横に錯綜し居れば軍の進退には相當影響ありしなるべし。

廟行鎮に爆彈三勇士の忠魂碑あり。また三勇士その他の各勇士の突進せる經路を詳細に圖示せるもの立てり。吾等より以前に既に一團來りて、この邊の戦鬪につき説明をなし居れり。佇みて聽聞す。

一尺の土を楯としたたかへる話を聞きつ吾はうごかず

現し世にただ一つなる命すてて直に進みし路をしるせる

巡覽する内に廣き畑地に青々と野菜の見事に生育せるところあり。軍に屬し臺灣の人來りて耕作に従事すと聞く。

たたかひの跡を耕しつはものの糧をつくれり臺灣の人ら

吾等が南京にて乗れる自動車の運轉手も臺灣の人なりと云へり。

日本人は主として虹口地區に居住す。商店は勿論日本領事館、小學校、日本人俱樂部等の諸機關もこの地に在り。虹口の東部にして黄浦江岸なる揚樹浦には各國汽船會社の埠頭、倉庫等並び立てり。今次事變に入りて後、共同租界の工部局は蘇州河以北の警察權を放棄したるにより、今は皇軍によりこの地域の治安は維持せられ居る状態なり。

共同租界の黄浦江に面せる地域をバンドと稱しビジネス・センターをなし各國の銀行、汽船會社その他の商事會社の宏壯なるビルディング軒を並べり。我

が横濱正金銀行その他五大銀行を始め各汽船會社等もここに在り。江岸に鐵鎖を繞らせる芝生遊園ありて我國と因縁淺からざるパークス氏像などここに立てり。

蘇州河の稍南にしてバンドより直角に西に向ひて共同租界を一直線に横斷する街路を南京路と云ふ。上海の銀座通りとも稱すべくシヨツピング・センターをなし中外人の大商館は大概ここに軒を並べり。永安公司、先施公司などの大デパートもここに在り。競馬場は南京路の西端に在り、曾て二十五萬弗の配當をなせしことにより有名なり。カセイ・ホテル、パレス・ホテルは南京路の東端バンドに接するところに在り。今次事變當初支那飛行機の盲爆に遇ひ一部破壊せし由なれど今は修復あり。吾等是一日早曉暗き頃よりこのホテルの前面に立ちゐたるに多數の男女労働者群をなし南京路を來り、バンドより舁に乗れり。恐らく對岸の浦東地區、又は下流にある工場へ通ふものなるべし。晝間の南京路はビジネス、又はシヨツピングにて曉とは別種の人等の往來頻繁なり。夜間は遊樂の爲め特に雜沓を極む。

#### 南京路の曉

南京路を曉早く打ちむれてバンドへ急ぐをとこをみなら  
足はやにむらがり通る女工らの手にせるものの種々なる形

#### 南京路の晝

難解の支那字看板を見つつ過ぐ書き添へし英語にて意味は判れど  
南京路ゆき交ふ人の種々相のこの現實を如何に思はむ  
日本の若き婦人の二人きて今來しばかりのわれに道問ふ

蘇州河以南の共同租界にては法幣を使用す。日本貨幣通用せざるにあらず一圓を一弗として取扱ふ故馬鹿々々し。吾等が先月二十九日に兩替したるときは法幣百弗に對し邦貨八十三圓なりしが一週間後の今日は七十八圓に下落し鳥渡の間に六パーセントの變動を生ぜり。

佛租界をドライブしつつ見物す。住宅區域は道路廣く閑靜にして樹木多く氣持よし。上海自然科學研究所は佛租界に在り。行きて見學す。今次の交戦中もここに在りて研究を繼續せる新城博士以下諸氏の行動は學者として敬意を表す

るに足るべし。屋上に上りて當時の實見談を聞く。聞北方面の我軍は租界を越えて南市方面を攻撃せしにより、砲彈は頻々と屋上を飛びたりと云ふ。

佛租界は安南人の巡捕ありて警備す。その取締寛大なるを以て諸種の遊び場多く、また各種犯人の潜伏するに自由なりと云ふ。排日抗日の根據もこの租界内に在りと云ふ。

大中農牧場は日支合辦の株式會社にして最優等の牛乳を生産販賣する目的を以て設立せられ、郊外なる寶山縣彭浦郷に二十餘萬坪の地をトシ目下牧舎建築中なり。土地の約十分の一を牧場とし残餘は乳牛の飼料を供給する農地に充つる計畫なりと云ふ。その株式の大部分は東横興業會社所有す。岡田幸次郎君常時駐在員として日夜建設に奔走中なり。現場に至り見るに平坦なる土地にして小き林點在しトーチカの殘骸もありと聞く。

十月八日、晴、今日は愈大陸を離れて歸る日なり。煙草など買ひて埠頭に至る。前々日淺間丸が當地寄港を取り消して内地へ直行せし爲め吾等の乗る上海丸には旅客殺到し盛況なり。見送りの諸氏に別れ、甲板に上りて埠頭を見下せ

ば加賀山學君あり、上下より互に久瀾を謝す。

十時出帆し黃浦江を下る。沿岸の風物を眺めつつ揚子江の本流に入り、低き平坦なる崇明島を左に見て濁流を下り一路長崎に向ふ。

今見たる崇明島は揚子江中に在りて面積七百平方料を超え人口五十萬に及ぶ島なり。嘗て利根河の河口に立ち、廣き河なりと感じたる吾等には河口百料に達すと云ふこの邊の揚子江を河なりと直感することは出來ざるなり。地理學に於て河なりと教へらるるが故に河なるべしと信ずるまでのことなり。これは理窟にあらず。吾等の今日までの經驗は河と云へば殆んど總てが對岸の見ゆる場合のみなればなり。他國に到りその地理、人情、風俗、習慣を觀察する場合に特に注意すべきは過去の狭き經驗にとらはることなりとす。他國民との間の相互理解、意志疏通をはかる場合にも注意すべきは無批判に經驗を亂用することとなるべし。揚子江の大なることを示す一の實話あり。嘗て上海より乗船し、初めて海外に出でたる支那人が關門海峽を通過し、瀬戸内海の風光を眺めつつかかる清澄なる大河の存在する日本は聞きしに勝る大國なるべしと感歎せりと云ふ。

五十日近くの旅を續けたるに懸念せし程の病氣にも罹らず、恙なく歸路につくことを得るは偏に東道の諸君の周到なる用意の賜と深く感謝す。

高千穂の峯あるかたのひんがしへ今し船出す心和ぎつつ  
大陸を今船出すとそちこちの御世話になりし方へ無電す

曾て頼山陽が天草に渡らんとし『雲耶山耶吳耶越。水天髣髴青一髮。萬里泊舟天草洋。煙橫蓬窗日漸沒。云々』と詠じたるは東方より西方に向ひてのことなるべし。吾等は昔の吳の國、越の國を見巡りて今反對の方向に、日出づる國へ歸りを急ぎつつあるなり。

揚子江の濁りの消えし海原うなほらの青きそぎへに雲わきたつも

\*

十月九日、晴、朝早く起きて日の出を拜す。世界地圖上にては一衣帶水とも云ふべき支那海も船にて渡ればなかなか遠きものなり。船は昨日より走りつづ

け居れども、未だ陸らしきもの見えぬ。甲板のベンチにもたれ、今回旅行せし先々のことを想ひ浮べ、母國を中心とするアウタルキーの問題などそこはかとなく考へ居る内に漸く遙に青く島らしきもの見えそむ。幾つかの島山に近づきまた離れ遠ざかり行く。

青き島をつぎつぎに見て不知火しらぬひの筑紫の海に今歸り來つ

午後一時四十分過長崎の岸壁につく。

長崎の港に入りぬ大小のドックにこもる雄々しき船ら  
幾度かためらひし旅もぶじに終へて今おり立てり日本の土

二時四十五分岸壁をたち十日午後四時四十分東京驛につく。(終)



昭和十七年二月十五日印刷  
昭和十七年二月十八日發行

(非賣品)

著者

小宮次郎

印刷者

東京市麴町區霞ヶ關三丁目三番地  
ダイヤモンド社印刷部  
代表者 神尾福太郎

發行者

東京市豊島區駒込五丁目九六八番地  
小宮次郎

423  
286

終